

九州体育・スポーツ学研究

第33巻 第1号

〈原 著〉

- 小学校1年生のゲームに関する一考察
 —ダンダンゲームの実践を用いたゲームへの「参加」と技能の向上の視点から—
 久保明広・松本大輔 1
- 男子ラグビーチームの夏期合宿期間におけるチームスタッフの気分・感情の変動
 —同一チームにおける男女および学年による比較検討—
 辰見康剛 9

〈九州体育・スポーツ学会第67回大会発表抄録集〉

1. 特別講演 19
 2. 全体シンポジウム 21
 3. 第1専門分科会シンポジウム 23
 4. 第2専門分科会シンポジウム 25
 5. 第3専門分科会シンポジウム 27
 6. 第4専門分科会シンポジウム 29
 7. 第5専門分科会シンポジウム 31
 8. 研究推進委員会企画テーマ1 33
 9. 研究推進委員会企画テーマ2 35
 10. トピック・セッション1 37
 11. トピック・セッション2 39
 12. トピック・セッション3 41
 13. ラウンドテーブル・ディスカッション 43
 14. メンタルトレーニング・セミナー 45
 15. スチューデント・セッション 47
 16. 体育連合・学会共同企画 49
- 〈九州体育・スポーツ学会第67回大会報告〉 51
- 〈事務局ニュース〉 55

「九州体育・スポーツ学研究」投稿規程

1. 本誌への投稿は、共同研究者も含め原則として九州体育・スポーツ学会会員で、年会費納入者に限る。但し、編集委員会が必要と認めた場合には、会員以外にも寄稿を依頼することがある。
2. 投稿論文の種類は、総説、原著論文、実践研究、研究資料、短報、研究上の問題提起のいずれかとし、他に投稿中でないものに限る。
3. 投稿論文の掲載可否および掲載時期については、編集委員会において決定する。
4. 本誌に掲載された論文の著作権は、九州体育・スポーツ学会に属する。
5. ヒトを対象とする研究は、ヘルシンキ宣言の精神に沿ったものでなくてはならない。
(「<http://www.med.or.jp/wma/helsinki.html>」参照)
6. 原稿の作成は下記の要領による。
 - 1) 原稿の表紙には、(1) 題目、(2) その論文の内容が主として関係する研究領域、(3) 総説、原著論文、実践研究、研究資料、短報、研究上の問題提起の別を明記する。
 - 2) 和文原稿と英文原稿のいずれも、ワードプロセッサで作成し、A4版縦型横書き、40字30行とする。フォントの大きさは10.5ポイントとし、英文および数値の表記には半角を使用する。なお、計量単位は、原則として国際単位系(SI単位系)とする。
 - 3) 和文原稿には、別紙として、英文による題目と抄録(300語以内)、5語以内のキーワードを添える。さらに、抄録の和文訳と和文キーワードを添付する。
 - 4) 英文原稿には、別紙として、和文による題名と抄録(600字以内)を添付する。
 - 5) 本文、注記、文献、図表の規定ページ数は、原則として、総説30頁以内、原著論文、実践研究、研究資料25頁以内、短報、研究上の問題提起7.5頁以内とする。題目、著者名、所属機関、キーワード、英文抄録及びその和訳については、上記のページ数の上限に含めない。規定ページ数を超過した場合や特殊文字の印刷を必要とする場合は、その実費を投稿者が負担する。
 - 6) 図や表には、通し番号とタイトルをつけ、本文とは別に番号順に一括する。図表の挿入箇所は、本文原稿の行間に、それぞれの番号を朱書きして指示する。挿図は、図中の文字や数字が直接印刷できるように、原則として白黒で鮮明に作成する写真は原則として白黒の鮮明な画面のものとする。なお、カラー図表や写真などで特別な費用を要した場合には、その実費を投稿者が負担する。
 - 7) 文中での文献の記載は、原則として著者・出版年方式(author-date method)とする。また、引用文献は、本文の最後に著者名のABC順に一括し、定期刊行物の場合の書誌データの表記は、著者名(発行年)論文名、誌名巻(号):ページの順とする。詳細は、(社)日本体育学会「体育学研究」の「投稿の手引き」に準ずる。
(社)日本体育学会ホームページ「<http://taiiku-gakkai.or.jp>」を参照。
 - 8) 提出する原稿はPDFファイルにし、図表および写真(以下、図表等)は、原稿の最後にまとめて挿入するか、別途、PDFファイルにする。なお、図表等が多い場合には、複数のファイルに分けて投稿してもよい。
 - 9) 提出する原稿は、公正な審査を期すため、謝辞および付記等は原稿受理後に書き加えることとする。
7. 掲載論文の別刷りは、所定の部数を寄贈するが、それ以上の部数を希望する者は、著者校正の際、その必要部数をゲラ刷りの表題のページに明記する。この場合の実費は全額投稿者負担とする。
8. 原稿と図表等のファイルは、九州体育・スポーツ学会事務局にEメールで送付する。なお、Eメールには、氏名、所属機関、連絡先を明記する。

〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学教育学部内
九州体育・スポーツ学会事務局 担当 日高正博
Eメールアドレス: kyutai.office@gmail.com

付 則

本規程は、2008年8月31日より施行する。

(2018年9月15日一部改正)

〈原 著〉

小学校1年生のゲームに関する一考察

—ダンダンゲームの実践を用いたゲームへの「参加」と技能の向上の視点から— 1
久保明広・松本大輔

男子ラグビーチームの夏期合宿期間におけるチームスタッフの気分・感情の変動

—同一チームにおける男女および学年による比較検討— 9
辰見康剛

〈九州体育・スポーツ学会第67回大会発表抄録集〉

1. 特別講演

地域貢献とスポーツ文化興隆..... 19
演 者：幸田亮一（熊本学園大学学長）
司 会：橋本公雄（熊本学園大学）

2. 全体シンポジウム

スポーツによる地域の活性化..... 21
シンポジスト：湯之上聡（熊本ヴォルターズ代表）
萩原悟一（鹿屋体育大学）
中山純治（福岡県スポーツ振興センター）
コーディネーター：斉藤篤司（九州大学）
熊谷賢哉（長崎国際大学）

3. 第1専門分科会シンポジウム

第1部「岩崎健一先生を偲んで」..... 23
演 者：荒井久仁子（熊本健康体力づくりセンター）
司 会：下園博信（福岡大学）

4. 第2専門分科会シンポジウム

ウォータースポーツのバイオメカニクス 25
演 者：尾関一将（大阪体育大学）
市川 浩（新潟医療福祉大学）
下永田修二（千葉大学）
司 会：田原亮二（名桜大学）

5. 第3専門分科会シンポジウム

幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」とは何か？..... 27
演 者：安田量寛（さくら保育園）
浅尾理恵子（熊本大学教育学部附属幼稚園）
西田明史（西九州大学短期大学部）
司 会：松本大輔（西九州大学）

6. 第4専門分科会シンポジウム

健康づくりの現場と研究..... 29
演 者：松原建史（㈱健康科学研究所）
山本直史（愛媛大学）
司 会：東恩納玲代（名桜大学）

7. 第5専門分科会シンポジウム

障がい者スポーツにおける競技力サポートについて..... 31
演 者：高橋恭平（熊本高等専門学校）
甲木秀典（西九州大学）
司 会：池上寿伸（佐賀大学）

8. 研究推進委員会企画テーマ1

- 運動部活動が大学生のメンタルヘルスと生活習慣に及ぼす影響…………… 33
須崎康臣（島根大学）
齊藤篤司（九州大学）
杉山佳生（九州大学）

9. 研究推進委員会企画テーマ2

- 予測不可能条件における素早い方向転換動作と部活動指導者の評価との関連性…………… 35
—大学女子バスケットボール部を対象として—
亀田麻依（鹿屋体育大学）
木葉一総（鹿屋体育大学）
前田 明（鹿屋体育大学）

10. トピック・セッション1

- これからの保育者・教員養成のあり方を考える…………… 37
演 者：瀧 信子（福岡こども短期大学）
中島憲子（中村学園大学）
松本大輔（西九州大学）
司 会：谷川裕子（純真短期大学）
企 画：第3専門分科会自主企画
西田明史（西九州大学短期大学部）
松本大輔（西九州大学）

11. トピック・セッション2

- 大学スポーツの振興と企業連携…………… 39
演 者：田中秀明（東亜道路工業株式会社）
大賀博文（株式会社スポーツフィールド）
萩原悟一（鹿屋体育大学）
今村律子（福岡大学）
企画・司会：池田孝博（福岡県立大学・大学スポーツ振興九州地区検討会）

12. トピック・セッション3

- 武道教材の授業実践モデル…………… 41
演 者：榑崎教子（福岡教育大学）
本多壮太郎（福岡教育大学）
企画・司会：則元志郎（熊本大学）

13. ラウンドテーブル・ディスカッション

- 自己成長，学修成果を導く大学体育…………… 43
—挑戦的課題達成型授業の有効性と実践—
話 題 提 供：西田順一（近畿大学）
木内敦詞（筑波大学）
藤原大樹（保健医療経営大学）
企画・司会：西田順一（近畿大学）

14. メンタルトレーニング・セミナー

- 実業団選手を対象としたメンタルトレーニングの事例報告…………… 45
演 者：山崎将幸（東亜大学）
企画・司会：下園博信（福岡大学）

15. スチューデント・セッション

若手研究者と語る「大学院生は何をするのか、できるのか」…………… 47

話題提供者：大橋充典（久留米大学）

加藤忠彦（九州産業大学）

内藤貴司（国立スポーツ科学センター）

企画・司会：松田晃二郎（九州大学大学院）

齊藤篤司（九州大学）

16. 体育連合・学会共同企画

体力づくり（回復）をめざしたストレッチおよびバランストレーニング…………… 49

演 者：笠井妙美（東海大学）

企 画：則元志郎（熊本大学，九州地区大学体育連合 企画委員長）

齊藤篤司（九州大学，九州体育・スポーツ学会 企画委員長）

〈九州体育・スポーツ学会第67回大会報告〉…………… 51

大会実行委員長 宮林達也（熊本学園大学）

〈事務局ニュース〉…………… 55

小学校1年生のゲームに関する一考察

—ダンダンゲームの実践を用いたゲームへの「参加」と技能の向上の視点から—

久 保 明 広 (鳥栖市立弥生が丘小学校)

松 本 大 輔 (西九州大学)

A Study of the “Game” of the Elementary School First Grade

— Improvement of the skill through the participation in game base on
Dan-Dan-Game practice —

Akihiro Kubo¹⁾ and Daisuke Matsumoto²⁾

Abstract

The problem of the lower grade ball game lesson was to become a binary opposition of Teaching skills or Noninterference by the fun of emphasis. In recent research, learning has attracted attention as a concept of participation. In this learning, the participant aimed at the creation of the skills and knowledge through participation and an experience.

The purpose of this study was to consider the Game of the Elementary School First Grade from changes in children’s learning focusing on participation. This study used a qualitative study as approach from the inside of classes. This study’s central method was Episode recording method. The object were first grader students and teaching materials was the Dan-Dan-Game in this study.

As the result of this study, it was explained that learning of skill and learning of making game were interacting each other when student’s learnings were changed and deepened. In other words, from the results of the analysis, it was possible to clarify the learning contents of the game which enhances skills while deepening the fun of game of competition by trial and error.

Thus it was necessary to lead student to meaningful learning to consider the relationship between skill and game through participation.

Key words: Ball Game of the Elementary School First Grades, Participation, Episode recording method

1 研究の目的

低学年のボールゲームでの学習は、技能の個人差や技能の未熟さといった子どもの実態とそれ以降の学年との系統性という言葉に基づき、均一の動きの学習を目的とする授業が行われていることが多いのではないだろうか。例えば低学年のボールゲームである「的当て」において

は、子どもの投げる動きの未熟さという実態を基に「遊びの要素を取り入れた活動の中で、多様な投げ方の発生や投げることの正確さを高めることが重要である」(三輪, 2013)といった指摘である。この指摘からは本来「的当て」という運動が持っている個人対個人、またはチーム対チームでどちらがより高得点を取れたか、という競争が面白いゲームであるというゲームの意味を考え

1) Yayoigaoka elementary school, 4-329 Yayoigaoka, Tosu-shi

2) Nisikyushu University, 3-18-5 Kmizono, Saga-shi

ず、投げ方を身に付けさせる授業になってしまっているということである。つまり、低学年のボールゲームではゲームそのものの学習ではなく、動き（技能）や作戦の要素を取り入れたゲームを通して動き（技能）の学習になっていることが多いということである。

こうした考えは、脱文脈的な行動としての知識や技術を身に付けることが学習であり、低学年の段階ではまずもって動き（技能）の基礎をゲームを通して楽しく学習することが大切である、という伝統的な学習観によるものであるといえる。一方で、低学年のゲームでは、ボールを使って競争させておけば楽しんで活動している、といういわば指導を放棄した（鈴木, 2016, p.86）放任のような授業も見られる。つまり低学年のボールゲームの授業では教え込みか、子どもの過度の楽しさを強調するあまりの放任か、といった二項対立に他の学年よりも陥りやすいという問題があると考えられる。

ところで近年、教育界においては、佐伯（1995, p.30）が「獲得」という概念において捉えられてきた学習を「参加」という概念で捉えなおしている。この「参加」による学習について広石（2005）は「学習が共同体における実践の具体的な『状況』への『参加』において生起していること、学習の進展とアイデンティティ形成が両輪のように統一的過程においてなされること、個人が共同体への周辺から中央へ参加していく認知的発達化に関わる実践は、共同体が組織全体の構造を保ちつつ、その自己更新・再生産を行うことと関連していること」とまとめている。またこうした学習の背景には、「『教師中心から生徒中心へ』『教えから学びへ』『伝達から対話へ』といった教育的スローガンを二極的な振り子運動に矮小化させる議論に還元できない教育の見立て直し（広石, 2005）」があるとされる。つまり、こうした「参加」という学習の捉え方からは、教師の教え込みか、子どもの楽しさか、といった二項対立の授業を改めて問い直す契機を含んでいると考えられる。さらにこうした「参加」の概念は、主体的・対話的な学びとして学習者の論理から授業を捉えなおすアクティブ・ラーニングの考え方も一致するといえる。

ところでこれまでの体育授業における授業研究の検討においてはその多くが、授業の前後における意欲等の測定尺度の高まりや、技能、記録の高まりといった、行動の結果を測定しその結果より授業の工夫や指導法の有効性を認める研究が多い。しかしそうした授業研究の検討で確認できる変化について、柴田（2007）は「変化した痕跡を確認しているにすぎず、まさに子どもが《変化している》様子を捉えたことにならない」と指摘する。そして柴田（2007）は教育学研究における授業分析の意義

において、「授業分析は、現実的で具体的な教育実践の事実を出発点とし、現場における教育学の理論構築を指向する研究の実践である」としている。このような教育学研究における授業分析のあり方として、授業を客観的に対象化し、事実在先立つ仮説や理論によって、子どもの学びを取捨選択するのではなく、そこに生きる子どもの学びそのものを、そのものとして捉えることが重要である。そしてその理解を通してこそ「具体的な個別で一回性の授業の世界を、子どもがどのように生きているかを捉える」（柴田, 2007）こととして、子どもの変化そのものを捉えることが可能になるといえる。

さらに土場（2006）は「行為の意味（価値）は、その行為を意味づける解釈的文脈から離れて理解することはできない」、「行為者の視点からそれらをどのような文脈のもとで意味づけているのかを研究者が解釈することによってのみ捉えることができる」と述べ、状況と文脈を共にした内からの理解による授業分析の重要性を述べている。

以上を踏まえ、本研究では、授業の内からのアプローチによる授業分析を用いて、教師か子どもかといった二項対立的な軸を超えた、共同体的実践としてのゲームへの「参加」を通して、ゲームの変化とそこに「参加」している学習者の変化（特に技能の変化）がどのように起きているかを分析し、明らかにすることで小学校1年生のゲームに関する学習内容についての考察を行うこととした。

2 研究の方法

(1) エピソード記述

これまで述べてきた授業における状況と文脈を踏まえ、子どもの学びの意味を共有し理解することで授業を検討していくという授業の内からのアプローチという視点における研究の方法としてエピソード記述が考えられる。

エピソード記述とは、その事象における観察者の「問題意識や基本的な問いとの関連で、その描き出された生の断面の『意味』を掘り起こしてこそ、真のエピソード記述」（鯨岡, 2005, p.13）とされているものである。また、エピソード記述によって描き出されるものとは、「『問主観的に把握されるもの』こそ、エピソード記述の中心、要になるもの」（鯨岡, 2005, p.16）と述べられている。つまり、エピソード記述とは、単に事象をそのまま表すのではなく、その事象と、観察者である「私」の問題意識の関連の中で捉えることができた生の断面の意味を描き出すことであるといえる。これはある出来事を観察し時系列的に記録した記述を観察者の問題意識との

関連で検討を行う、といった観点ではなく、エピソードを記述するということが観察者の問題意識との関連によってのみ描き出される検討を含んだ記述であるということである。

このようなエピソード記述の方法を、鯨岡（2005, p.130）は、(1) 背景の提示、(2) エピソードの本体の提示、(3) メタ観察（考察）という3段階構成から説明している。

このような関与観察によるエピソード記述を用いて授業実践の検討を行うこととした。

(2) 調査対象及び調査内容

A県B大学附属小学校1年生35名に対して平成27年1月から2月の間に行われたゲーム領域の授業全6時間を対象として、その授業で実際に起きた出来事をエピソードとして描き出し、その事象に関わる子どもの技能の変化について考察、分析を行った。

(3) 分析方法

エピソード記述については鯨岡（2005, p.130）の手順を参考に、まずどんな問題意識をもってその場にいたのか、またはそこがどのような場であったかという(1) 背景の提示。その授業で実際に起きた事象を、その状況と文脈にいる「私」と相手の関与の中で、エピソードとして描き出す(2) エピソードの本体の提示。そのエピソードの意味を再度検討する(3) メタ観察（考察）の手順で行った。

関与観察によるエピソード記述法における内的妥当性を保障するために、方法のトライアンギュレーションと調査者のトライアンギュレーション¹⁾を用いることとした。具体的には授業の観察者である協働研究者によるScriven（1973）が提唱した「Goal-free evaluation」の視点を用いた参与観察によるフィールドノート及び子どもの学習カードの記述及び授業の映像の分析から授業について分析し記述した（方法のトライアンギュレーション）。その後、授業の概要と関与観察によるエピソード記述におけるメタ観察の妥当性の検討を2名で行った（調査者のトライアンギュレーション）。

(4) 小学校低学年のボールゲームとしてのダンダンゲームの授業の概要

ダンダンゲームとは中央に置いた4個の段ボール（約40cm×50cm×30cm）に3m離れた位置からボール（お手玉）を当て、段ボールを相手側のコートに動かし合う事で勝敗を競うゲームである（写真1）。このゲームの面白さは段ボールを少しでも相手側に動かすことができるか

どうか競争することである。よって子どもの立場からは、段ボールを相手側に動かせるかどうかを競い合うこ



写真1 ゲームの様子

とに「参加」することが学習と捉えられる。

ルールとしては「5人対5人で競い合い、ボール（お手玉）は一人一個。投げた後は自分で拾いに行く。2分30秒終了後に中央の線より相手側のコートに段ボールがあれば1点となる」である。なお7チームを設定し3コートで試合を行い1チームは審判及び見学とした。

学習のねらいを「少しでも相手コートに動かすためにはどうすれば良いか夢中になりながら、自分なりの投げ方を工夫したり、仲間と協力したりしながら競争を楽しむこと」とし、6時間で授業を構想した。ゲーム理解の不熟な1年生に対して、まず初めに「勝つために少しでも段ボールを相手コートに動かすためにはどうしたらいいか」という問いを教師と子どもが共有した。この問いこそが単元を貫く課題であり、ゲームへ「参加」するための共通の課題であると捉えられる。

この課題に対する認識（ゲームに対する理解）の深まりの過程として、学習過程をねらい1「今持っている課題の中でゲームを楽しむ」、ねらい2「より目的意識をもった課題に対して工夫してゲームを楽しむ」と構成した（表1）。ゲームに勝つためにはどうすれば良いか、という単純な課題から、チームが勝つためには何をすればよいか、というより目的意識をもった課題の中で自らが試行錯誤しながら創意工夫を重ねてゲームを行う子どもの変化を想定した学習過程であるといえる。各1時間の

表1 ダンダンゲームの学習過程（全6時間単元）

1	2	3	4	5	6
オリエンテーション試しのゲーム	ねらい1 今持っている課題の中で、ゲームを楽しむ		ねらい2 より目的意識を持った課題の中でゲームを楽しむ		

表2 各1時間の流れ(45分)

慣れのゲーム 5分程度	はじめ 準備 カード記入	ダンダンゲーム			終わり 片付け ふり返し
		ゲーム1 2分半/ 2分半	ゲーム2 2分半/ 2分半	ゲーム3 2分半/ 2分半	

流れは表2の通りである。

3 結果と考察

(1) 参与観察によるフィールドノートと学習カードの記述分析による授業の分析

本研究の授業実践の分析、検討としてのエピソード記述において、そのエピソードが授業の全体の中でどのように位置付くかを明らかにするために、全6時間の授業の実際について参与観察によるフィールドノートと学習カードのめあての記述の変化の分析を基に以下に記述する。

① 1, 2, 3 時間目の様子

～ルールやゲームに慣れる時間～

1時間目は準備の仕方、ルールの説明を行い、試しのゲームをした。「勝つためにはどうしたらいいか」を考えていくことを問いかけ、競争することを楽しもうと教師が伝えた。

2時間目からめあてを持たせた。めあては、まずチームのめあてを書かせ、それに対して個人のめあてを書かせるようにしていた。個人としての勝ち負けではなく、チームとしての勝ち負けがあり、そのために自分はどうすべきか、どう貢献できるかがゲームの特性であると教師が捉えたからであろう。7チーム中3チームが「チームの協力」をめあてとし、残り4チームが「真ん中をねらう」や「力強く投げる」などの技能的なめあてとしていた。

様相としては、ゲームに熱中する姿が見られた。しかし、熱中し過ぎて決められた線を越えて投げる、ボールを取りに行く時に段ボールを有利になるよう動かすなどのルール違反が多く見られ、不満も多かった。1年生では容易に想像できる状況であった。そこで、教師からの一方的なルール設定ではなく、子どもの意見、特に楽しむことができなかつた子どもの意見を基にあいまいなルールを整理したり、設定したりしていた。

ゲームでは自分なりの投げ方（下から転がして投げる、倒れこみながら投げる）で段ボールに当てようとする姿に対して、「おっ当たった!」と教師はまずは当たったことを認める声かけをしていた。

③ 4, 5, 6 時間目の様子

～より勝つことを目的とした時間～

これまでの時間でゲームやルールに十分慣れてきたと教師は判断し、4時間目からはねらい2「より目的意識

を持った課題の中でゲームを楽しむ」段階とした。そこで導入場面で、ボールを転がして常に段ボールに当ててはいるものの、動かすことができていない子どもと、一方で力強く投げ当てている映像を紹介し全体で共有した。子どもたちは「全然動いていない」、「(相手が力強く当てたことで)一気に動かされている」とつぶやいたため、教師から「段ボールに当てるのがねらいではなく、勝つために段ボールを動かすんだよね、さあどうしたらいい!？」と投げかけた。すると子どもたちはチームのめあてに「力強く投げる」ことを挙げ、個人でも「力強く」という言葉を多く使ってめあてを立てていた。

ゲームでは今まで以上に足を踏み込んだり、手を振り切ったりして力強く投げようとしている姿があった。また下から投げて確実に当てながら段ボールを動かそうとしている姿もあった。しかし「力強く」ということで、友だちに教えられた上手な投げ方をしようとしたが、逆に投げにくそうにしている子がいた。手足のバランスが取れずに、段ボールに当てることすらできずに戸惑っていた。こうした子どもに対して教師は「まずは当たらないきゃ、段ボールは動かないよね。さあどうする!？」と声をかけた。このことで、自分なりの投げ方で段ボールに当て始めた。本実践では、いわゆるオーバースローを正しい投げ方としていたわけでないで、子どもは試行錯誤しながら投げる姿が生まれたと考えられる。

また多くの子どもたちが、勝つために一生懸命に段ボールを動かそうとしているものの、自分のボールが当たるか当たらないかがまずあり、その結果チームの勝利に貢献したという意識を持っている子もいるのではないかと捉えられた。つまり、チームのめあてと個人のめあてがまだつながっていないのではないかと、ということである。これは1年生だからこそ当然考えられる思考であり、決して授業の仕組みを失敗したものではないと考えられる。

このことは教師も考えていた様で5時間目は「チームのめあて」を「チームの作戦」という言葉に変え子どもに投げかけた。さらにチームとしての作戦の一つのきっかけになるために、またなかなか力強く投げ切れない子のために、軽い段ボールを加えた。すると、チームのめあてには「ねらう段ボールを決める」などが多く見られた。これは3時間目の「ねらって投げる」より、対象物が明確になってきている状況である。また個人のめあてが「○○をねらう」など自分の役割をはっきり持つようになっていた。実際にゲームでは無作為に段ボールに投げるというより、明らかにねらいとする段ボールに向かって投げていた。さらに「せーの」というかけ声とともに投げて、一つの段ボールを複数人数で同時に投げる

チームも出てきた。軽い段ボールは作戦を生み出しやすい状況を作り出し、投能力などが低位の子でもゲームに熱中するための手立てとして有効であったと考えられる。子どもたちは勝つためにはどうするかという試行錯誤の中で、自分の役割を見つけ、チームに貢献し、さらにチームとしての協力という必要性を生み出したように見えた。教師は子どもの思いを見極めて、言葉の表現を変えたり用具を変えたりすることも重要だと考えられる。

教師はゲームにおいて「さあ、どの段ボールをねらう!?', 「残り30秒、どれを動かしたらいい!?'と声をかけながら、勝利の為に個として貢献できること、チームとして協力できることを考えるように促していた。しかし、2分30秒というゲーム時間において、いまここで個として、チームとしてねらうべき段ボールを瞬時に判断することは1年生にとってはかなり難しいものではあった。具体的に言うと、残り10秒で、中央の線より自分の陣地にある段ボールを当て続けて相手陣地に送り出して失点を防ぐか、その段ボールは1失点とあきらめ、中央の線付近にある2つの段ボールを相手陣地に送りだし2得点とするかというような状況判断を迫っているのである。しかも個人ではなくチームとしての状況判断を問いかけているのである。「残り30秒、どれを動かしたらいい!?'とは、1年生にとってはかなり難題をつきつけているようにも感じられた。

6時間目は前時の様子をふまえ、残り30秒でゲームをストップし、その状況でチームとしてどうするかを1分考える時間を設けた。すると、チームとして状況を整理し、ねらう段ボールを決めたり、「せーの」と声をかけ合って投げたりする作戦が見られるようになった。子どもはこれまで以上、懸命にゲームに向き合い、勝ち負けを競い合うことを楽しんでいた。

(2) エピソード記述による授業分析

「エピソード『問いと技能とゲームの構成に関するエピソード』」

(1) 背景

授業対象者であるB小学校の1年生(35名)にとって私は担任である。9月に「投げる」を楽しむことを目的に授業を行っている。そこで子どもは上や下、近くや遠くに向かって、上から横から下からと様々な投げ方で、ボールやペットボトルなど様々な物を「投げる」ことを存分に楽しんでいる。投げることを楽しみながら、高いフェンスに近い場所からボールを投げて越すためには下から投げると良い、遠くにペットボトルを投げるためには上から投げると良いなどの気づきを私に伝えることが

できていた。

1年生の後半にあたる1月、まだ経験のない「ゲーム」を仕組む中で、「投げる」を手段とし勝つか負けるかを楽しむことを目的としたゲームを設定した。勝つか負けるかを楽しむことを目的とする中で、未経験である「ゲーム」を子どもがどう理解していくか、「投げる」技能とゲームがどう関係していくかという問題意識を持って、授業を行った。

(2) エピソード本体

私はゲームの紹介とともに、「勝つためにはどうしたらいいか」という問いを、子どもにテーマとして提示した。子どもはこの問いを意識するというよりも、目の前にある段ボールという目標物に当てたい、と必死になってゲームに取り組んでいた。ボールが段ボールに当たれば喜び、当たらなければ悔しがる、そして投げたボールを走って取りに行き、また投げるという単純な作業を無我夢中に取り組んでいた。私は段ボールに当てることができている場合は「当たったね」、当たらなければ「当たらなかったね」と言葉をかけていった。ゲームが進むと、決められた線をはみ出しながら投げている姿も多く見られたので、「ルールを守るんだぞ」という言葉もかけていった。

ゲームが進む中で、「段ボールに当てたい」という思いから、上からではなく下から投げる姿も見られた。しかしM児は下から投げて何度も何度も当て、段ボールを僅かに動かしているものの、相手側の強いボールに一気に段ボールを押し返されてしまう状況に直面していた。そこで、私はこの場面を動画で全体に提示し、子どもとのやりとりの中で、目的は段ボールに当てることではなく、勝つために段ボールを動かすことだと確認した。さらに、「動かすためにはどうしたら良いか」と問いかけをした。

その後、投げ方にあきらかに力強が見られ、投げ方がしっかりとしてきた。より一層懸命にゲームに向かう姿が見られた。しかし、うまく段ボールに当てることができずに戸惑っているY児らがいた。そこで私はY児らに「まずは当てなければ、段ボールは動かないよ。さあどうする!?'という問いかけをし、ゲーム後には全体に投げかけた。

その後単元終了まで、子どもは段ボールに向かって目いっぱい力強く投げて動かしたり、下から投げて何度も当てて動かしたり、倒れた段ボールに向かっては下からや横から投げて動かしたり、「せーの」という掛け声とともに仲間と一緒に投げて動かしたりした。M児は下から力強くかつ正確に何度も当ててことでチームに貢献し、

Y児は段ボールの場所や自分の調子に合わせて上や下から投げるようにして貢献していた。そしてM児もY児も含め全員がゲーム終了の合図とともに、勝ち負けに一喜一憂する姿を見せた。

(3) メタ観察

「段ボールに当てたい」から「段ボールを動かしたい」、さらに「段ボールを動かせば勝つ／動かさなければ負ける」へ。

1年生にとって、目の前にある目標物に当てたいというのは自然発生的な思いである。そこに教師が当たったことを称賛していくことで子どもの当てたいという思いと行為はさらに正当化され、もっと当てたいという思いを生んだといえよう。その中で、当ててはいるものの段ボールを動かすことができなかつたM児は、当てることに懸命で、まだ「ゲーム」の意味を深く理解できていなかった、もしくは動かすための技能を發揮できていなかったといえよう。このことを私がM児だけの状況と捉えたのではなく、全体的な状況と判断している。全体の場で、段ボールに当てるのが目的ではなく、勝つために動かすことを共通理解したことは、全員がゲームの意味を理解するという同じ土俵に上げたことにつながったと推察される。これ以降、子ども全員がゲームの意味を理解し、自分なりに試行錯誤してゲームに参加していったことから、単元における大きな分岐点といえよう。

「当てるのではなく動かす」、そのために力強く投げようとする姿が生まれたのはごく自然であろう。私自身が直接投げ方の指導をしたわけではなくても、ゲームの意味の理解の深まりは、より試合に勝つためにはどうすればよいのか、という試行錯誤を生み出し、その中で、振り返りの映像や、周りの友達の動きに触発され投げ方を力強いものへと変化させていった。つまりゲームの状況や文脈を理解したことで、投げることの技能が高まったと推察される。しかしここで投げ方に戸惑うY児がいたのも、まさに投げることの技能差からであろう。力強く投げるために、多くの子どもはオーバースローを選択した。オーバースローが自分なりの投げ方としてはまった子どもとY児のようにはまらなかつた子どもがいた。つまりオーバースローの技能差である。ここで私はオーバースローの投げ方を指導したのではなく、「強く投げても段ボールに当てなければ段ボールは動かない。どうする!？」と声かけをしている。これはゲームの文脈に添った問いである。この問いに対してY児は試行錯誤をし、自分なりの投げ方、段ボールの場所や自分の調子に合わせて上からや下から投げる自分が自分にマッチしていると判断し、技能差を自らによって越えていったとい

えよう。「動きがあってゲームがあるのではなく、ゲームがあって動きがある」このこと象徴的な場面だと理解できる。さらに一つの段ボールを複数人で狙う等の作戦っぽいものが立ち現われてきたのは驚きでもある。この様にゲームが進む中で様々な投げ方が表れた、または作戦を考え始めたことは、この授業が投げ方の学習ではなく、ゲームの意味の理解を通じたゲームの学習であったからであろう。

さらに勝ち負けに全員が一喜一憂する姿こそ、本単元が「投げる」ことが目的ではなく「ゲーム」であったことを表し、技能差に関わらず全員がゲームを理解し、自分なりのかかわりで「参加」し、ゲームに勝つために楽しんでいた姿であると考えられる。

4 総合的考察

本実践では、子どもが試行錯誤する様子が二つ見られた。一つは「投げ方：どうやれば上手く投げられるだろう、当てられるだろう」である。そのときに、教師はオーバースローなどの型を示すことはしなかつた。そのことで、自分にとって今持っている力で最適だとする投げ方で、どう投げれば良いかと試行錯誤し、投げ方を高めていた。もう一つは「勝つためにはどうしたらいいのか」である。「段ボールに当てる」→「当てるだけでいいのか!？」→「段ボールを動かす」→「どうやって動かす!？」→「力強く当てる」、「何度も当てる」→「どの段ボールを!？」→…と投げて当てる行為が勝つための方法であることを自発的に子どもが学んでいった。この過程は、ダンダンゲームの理解の深さにつながっていた。つまり、まずは目標物に当てたいという自然発生的な思いから、動かしたい、あの段ボールを動かせば勝つ／動かさなければ負ける、というゲームの意味を理解していたのである。それは同時に、投げる技能が意味をもって高まっていくことにもつながった。

このようにゲームの意味を理解し、その中で競争に勝つために目の前の課題に対してどのように自分のまたはチームとして技能を發揮し作戦を考えるかを試行錯誤しながら、ゲームとしての競争の面白さに没頭していくことこそ本質的なゲームの学習ではないだろうか。低学年のゲームの学習内容を系統性という名のもとに、ゲームを通じた単なる動き(技能)の学習とし、その動き(技能)が以降の学年の基礎となるという考えでは松田(2014)が『『動き』(技能)があるから『運動やゲーム』(本番)があるのではない。『運動やゲーム』(本番)から『動き』(技能)があるのである』と述べるように本質的な系統性を持ったゲームの学習内容にはなり得ないと考えられる。

本研究では、子どもがその時間その時間の今持っている力で、ダンダンゲームの意味を理解し、ゲームそのものを学び、実践していた姿を分析することができた。それは、ダンダンゲームの意味の理解を伴った技能の深まり、という相互関係を「参加」を通じた学習内容として分析できたことを意味しているといえよう。

こうした視点からより多くの低学年のボールゲームの授業実践を重ね、系統性という問題に答えていくこと及びその中で教師の指導力について明らかにしていくのが今後の課題である。

〈付記〉

本研究は、2015年7月12日の「第64回九州体育・スポーツ学会（西九州大学）」にて発表した内容及び「松本大輔（2016）橋本美保・田中智志 監修 松田恵示・鈴木秀人 編著 教科教育シリーズ6 体育科教育. 低学年のボールゲーム. 一藝社.」において実践報告した内容に加筆・修正を加えたものである。

注

- 1) Flick (2002, pp.282-283) によればトライアンギュレーションとは、Denzin (1978) によって、「データのトライアンギュレーション」と「調査者のトライアンギュレーション」「理論のトライアンギュレーション」「方法のトライアンギュレーション」に分類されるとしている。本研究では「方法のトライアンギュレーション」及び「調査者のトライアンギュレーション」を用いた。

引用文献

Flick, U: 訳 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子

(2002) 質的研究の基礎付けと評価基準. 質的研究入門. 春秋社, 271-294.

広石英記 (2005) ワークショップの学び論—社会構成主義からみた参加型学習の持つ意義—. 日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』, 31: 1-11.

鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門 実践と質的研究のために. 東京大学出版会.

松田恵示 (2014) 体育における構成主義の再評価と「運動の特性」の捉え直し. 体育科教育, 62(1): 14-18.

Michael Scriven (1973) Goal-free evaluation. In: House, E.(ed.) School Evaluation: The politics & process: 319-328.

三輪佳見 (2013) つながりのあるゴール型ゲームの指導体系の構築をめぐる. 体育科教育, 61(2): 18-21.

佐伯胖 (1995) 文化的実践への参加としての学習. 佐伯胖/藤田英典/佐藤学 編 学びへの誘い. 東京大学出版会, 1-48.

柴田好章 (2007) 教育学研究における知的生産としての授業分析の可能性—重松鷹泰・日比裕の授業分析の方法を手がかりに—. 教育学研究, 74(2): 51-64.

鈴木秀人 (2016) 小学校低学年の授業を考える. 橋本美保・田中智志 監修 松田恵示・鈴木秀人 編著 教科教育シリーズ6 体育科教育. 一藝社, 74-87.

土場学 (2006) 社会的ジレンマ研究の社会的展開へ向けて. —分析的アプローチから解釈的アプローチへ—. 社会学年報, 35: 121-140.

(平成29年12月7日受付)
(平成30年3月31日受理)

男子ラグビーチームの夏期合宿期間における チームスタッフの気分・感情の変動

—同一チームにおける男女および学年による比較検討—

辰 見 康 剛 (九州共立大学)

Changes in the mood and emotions among staff of a collegiate male rugby team during summer training camps: Comparative study of men, women and grade on the same team

Yasutaka Tatsumi

Abstract

This study aimed to determine changes in mood and emotions among the staff of a collegiate rugby team during a summer training camp, and the influence of sex and grade on such changes.

We studied 26 student trainers or managers (male, $n = 9$; female, $n = 17$; seniors, $n = 14$; juniors, $n = 12$). Mood and emotions were evaluated using the Japanese-version Short-form POMS (Short-form POMS) four times over the 14-day duration of the camp.

Each subscale and total mood disturbance (TMD), were analyzed using two-way repeated measures ANOVA (sex \times period and grade \times period) with significance and marginal significance set at $p < 0.05$ and $p < 0.10$, respectively.

The analyses did not indicate interaction between any of the tested items. The main effects regarding sex were tension-anxiety, depression-dejection, fatigue, confusion, and TMD ($p < 0.01$ for all), with women scoring higher than men. The main effects of grade were fatigue ($p < 0.05$), anger - hostility ($p < 0.10$), confusion ($p < 0.05$). Seniors scored higher than juniors for fatigue and anger-hostility, but juniors scored higher for confusion than seniors. The main effect of period was marginally significant only for fatigue in both analyses ($p < 0.10$) and multiple comparison tests indicated that values were higher at the third and fourth evaluations than those at the first ($p < 0.05$ for both).

The role of team staff is important for constructing teams and organizations, but consideration and approaches according to sex and grade are required daily, not only during summer training camps.

Key words: Trainer, Manager, Staff, POMS

1. はじめに

近年、スポーツ現場においては選手を取り巻く環境に変化が生じており、多くのスタッフがチームならびに組織を支えるというケースが増えている(山口, 2017)。例えば、2015年に行われたラグビーワールドカップの日本

代表においては、最終登録選手31名に対して帯同スタッフは18名であった(日本ラグビーフットボール協会, 2015)。また、2018年 FIFA ワールドカップへの出場を決めたサッカー日本代表においても同様に、多くのスタッフが役割分担をし、監督を支えていることが記されている(二宮, 2017)。このように充実したチームや組織を構

築するために選手だけではなく、チームスタッフにおいても役割を細分化するケースが散見される。その中でも、特にトレーナー（以下、TR）やマネージャー（以下、MG）に対する期待は大きく、チームづくりをする際の要であるとも述べられている（宇津木，2011）。日本スポーツ協会（2007a）はアスレティックトレーナーの役割を「スポーツドクター及びコーチとの緊密な協力のもとに、スポーツ選手の健康管理、障害予防、スポーツ外傷の応急処置、アスレティックリハビリテーション及び体力トレーニング、コンディショニング等にあたること」としており、一般的なTRにも同様の考え方が浸透している。また、MGについては「競技クラブやチームを世話する人のことを指し、庶務係的な世話人」（今村・宮畑，1997）とされており、他には「主事、主務、雑用係等々とも呼ばれ、チームの総務および庶務的役割を担う」（村木，1995）と記されている。このようにTRやMGには、選手やチームの状況に応じて、多様な業務が求められることが知られている。

競技スポーツにおける合宿では他者との共同生活や時間的な束縛など、生活面からも様々なストレスに晒されることが示唆されている（時安ら，1995）。加えて、ラグビーのように外傷・障害が多発する競技（Brooks and Kemp，2008）においては、夏季強化合宿のように連日にわたり試合が行われる際にTRが果たす役割や責任はさらに大きくなると考えられる。また、MGにおいても合宿期間中は自チームの運営だけではなく、対戦チームや宿泊先とのやり取りなどの渉外活動が増えることにより、通常よりも業務量が増加すると予測される。近年では各スポーツ現場にTRやMGが配置されることは珍しいことではないが、その一方で選手や監督・コーチはTRやMGの具体的な業務内容やそれらに伴う心身の負担について把握していないことが問題視されている（Eberman & Kahanov，2013；Mensch et al.，2005）。さらに、チームスタッフの業務活動量の多さに伴い、長い拘束時間や不規則なスケジュール、また求められる活動とプライベートとのバランスを取るものの難しさなども問題としてあげられており、TRやMGは身体だけではなく心理的にも負担が高まりやすいことが示唆されている（Mazerolle and Eason，2016；Stephanie et al.，2008）。しかし、これらはいずれもインタビュー調査を用いた主観的評価に対する検証であり、チームスタッフを対象に客観的な指標を用いた検証が必要であると思われる。加えて、緊張、不安、抑うつ、疲労、活気などの要素を含むとされる気分・感情（横山，2005）を用いて検証すること、さらには回顧的な検討ではなく気分・感情を継続的に評価することが、より詳細な検証のために有効である

と思われる。

過去に男女の気分・感情に関する報告は多数認められているが、これらの調査方法を概観すると、男性もしくは女性のみを対象としていることや（河野ら，2013；志賀ら，2003；市原ら，2002）、同一の競技および課題を対象にしているものの、男女別々で活動を行っている者に対して検討をしていること（北村・吉本，1997；丸山，2013；城田ら，1998）、もしくは男女で共通の取り組みをしているが教育場面のように性差が影響を及ぼさない環境における調査であった（堀本ら，2011；杉浦ら，2004）。他には小倉・谷口（2013）が母性看護実習における調査を行っているが、この実習自体が男性は性差による違和感を抱きやすく、女性には受け入れられやすい環境であったことを示唆している。つまり、過去の報告では男性が主となる環境において、男女の気分・感情について検討をした報告は認められていない。しかし、実際には男性が主となる環境で活動する女性スタッフは多い。例えば、第52回全国大学ラグビーフットボール選手権大会セカンドステージに出場した全16チームには計221名のチームスタッフ（アドバイザー、監督・コーチ、ドクターなどを除く）が所属していたが、そのうち100名（45.2%）は女性であり（ベースボールマガジン社，2015）、1チームあたり6名程度が所属していることとなる。男子ラグビーチームで女性スタッフが活動をするうえでは、男性との人数的なバランスや体力面などから考えても、男性スタッフよりも心身の負担が高まりやすいことが予測される。したがって、男子ラグビーチームのように男性が主となる環境下で活動をするチームスタッフを対象とし、その気分・感情を性差の観点から検討することが必要だと思われる。

同様に、年齢や学年と気分・感情の関係性に関する報告はいくつか認められている。しかし、その対象はアスリート（西村，1998；時安ら，1995）や教育現場における学生（堀本ら，2011；岩瀬ら，2016）であり、TRやMGを対象にしたものは見当たらない。前述の通り、学生スポーツにおいても多くのチームスタッフが携わっており、一般的にその多くは学生である。そのため、同一チームにおけるスタッフの中には学年の異なる者が存在することとなる。そして、その差は有する経験や与えられる役割および業務に影響を及ぼすことが予想される。つまり、同一チームに所属していても、学年の違いが実際の活動期間中における気分・感情に影響を及ぼす可能性があり、これらを検討することも有益な知見につながると予測される。

以上のことから、本研究ではトレーナーとマネージャーから構成されるチームスタッフを対象に夏季合宿

期間中における気分・感情の変動を明らかにすることを目的とした。また、これらに性および学年がどのような影響を及ぼすかについても検証をした。これらをもとにチームや組織を運営する際に選手だけではなく、チームスタッフの気分・感情に対してどのような配慮が必要なのか、性別や学年と合宿期間中の継時的な変化も踏まえ検討をした。本研究から得られる知見は、性差や異なる学年という観点も含めチームスタッフの気分・感情を考慮した上でのより良い組織づくりや運営方法、さらにはチームスタッフの育成方法を考える際の一助になると思われる。

2. 方法

2.1. 期間と対象者

調査は20XX年8月に14日間にわたり行われたA大学ラグビー部の夏季合宿期間中に実施した。調査対象者は同チームに所属するTR11名とMG15名により構成される学生スタッフ26名(男性9名, 女性17名)であった(表1)。なお、各学年の人数についてはバラつきがあったため、4年生と3年生を合わせた上級生(14名)と、2年生と1年生を合わせた下級生(12名)に分類をした。合宿期間中はチーム全体がAグレードとBグレードに分かれ、それぞれのスケジュールで活動をしていたが、チームスタッフにおいてはグレード分けはなく、ローテーションにて各グレードを均等にサポートしていた。表2に合宿期間中におけるチームスタッフの主な活動内容を示した。なお、A大学ラグビー部は全国大会の常連校であり、年代別の日本代表選手も多数輩出している強豪校

である。

対象者には、調査実施に先立ち口頭と書面にて研究の目的と方法および個人情報の取り扱いなどについて説明をした。その後、署名による調査協力の同意を得た上で調査を実施した。なお、本調査は筆者の所属機関における研究倫理委員会の承認を得た上で実施をした(承認番号2017-02)。

2.2. 調査用紙および使用尺度

調査用紙はフェイスシートとアンケート用紙から構成されていた。フェイスシートには性別、学年、役職(TRもしくはMG)、記入日を記載するよう求めた。

アンケート用紙には気分・感情を評価することを目的として、日本語版POMS(Profile of Mood States)短縮版(以下、POMS短縮版)を用いた。POMSとは人間の情動を気分や感情、情緒などの側面からアプローチし、性格傾向ではなく一時的な気分の状態を評価することを目的にMcNairら(1971)によって開発された尺度である。また、その作成および信頼性と妥当性の検証は横山(2005)によってなされており、教育(堀本ら, 2011; 中村・兒玉, 2013)やスポーツの現場(丸山, 2013; 辰見ら, 2017)、その他様々な場面で広く用いられている(河野ら, 2013; Yatsuzuka, M., et al, 2005)。この尺度は、①緊張-不安(Tension-Anxiety: 以下, T-A)、②抑うつ-落ち込み(Depression-Dejection: 以下, D)、③怒り-敵意(Anger-Hostility: 以下, A-H)、④活気(Vigor: 以下, V)、⑤疲労(Fatigue: 以下, F)、⑥混乱(Confusion: 以下, C)という6つの下位尺度から構成されており、Vの

表1 対象者の内訳 (n=26)

	4年生	3年生	2年生	1年生
男性 (n=9)	3	1	0	5
女性 (n=17)	4	6	3	4

表2 合宿期間におけるチームスタッフの主な活動内容

トレーナー	マネージャー	全スタッフに共通
選手の健康管理	合宿施設とのやり取り	食事や補食の準備
コンディショニングとケア	他チームや関係者とのやり取り	トレーニング中のウォーターサプライ
外傷・障害への対応	広報活動	他のスタッフに対する連絡・報告業務
練習および試合などの準備と片付け	ビデオ撮影と編集	
個別トレーニングのサポート	ウェアなどの準備と管理	
トレーニング器具の管理	チームスケジュールの管理	
メディカル備品の管理		
トレーナールームの運営		

みがポジティブな気分を、その他の5つの尺度はネガティブな気分を測定する。各尺度5項目、合計30項目の質問に対して5件法で回答をする。また、Vを除く5尺度の合計得点からVのみを引くことにより、総合的気分(Total Mood Disturbance: 以下, TMD)を測定することが可能である。TMDと得点の意味付けについては、未だ十分な検討はなされていないが、何らかの問題を抱えた対象者を見出すのに役立つ可能性があるとして示している(横山, 2005)。なお、各下位尺度およびTMDにおいては得点が高いほど、その気分も高まっていることを示している。

2.3. 調査手続き

本研究では夏期合宿期間中にPOMS短縮版を4回実施した。1回目は合宿前日の休養日、2, 3, 4回目は合宿期間中とした(表3)。なお、4回目の調査は神田・黒田(1999)に基づき、合宿最終日の達成感や開放感などの終末効果を除外するために合宿最終日の3日前である11日目に実施した。いずれの調査も就寝前の時間を利用し、実施してもらった。また、他者からの影響を受けることのないよう個別で実施をしてもらうように依頼をした。調査用紙は合宿終了時にまとめて回収をしたが、その際も個人が特定されないように配慮をした。

2.4. 統計処理

各下位尺度およびTMDの素点を横山(2005)の年齢別換算表によりT得点に換算をした。続いて、各下位尺

度およびTMDのT得点に対して、男女の比較をする際には〈性別×時期〉、上級生と下級生を比較する際には〈学年×時期〉の反復測定二元配置分散分析を行った。また、いずれの分析においても時期の主効果が認められた項目に対しては、Bonferroniの方法を用いて多重比較検定を行った。統計処理は、Mac統計解析Ver.2.0(エスマ社)を用いて行い、有意水準を $p < 0.05$ 、有意傾向を $p < 0.10$ とした。

3. 結果

3.1. 男性と女性における比較

表4に男性と女性における1回目から4回目のPOMS短縮版下位尺度およびTMDのT得点を平均±標準偏差で示した。

反復測定二元配置分散分析の結果、全ての項目において交互作用は認められなかった。T-A得点[F(3, 96)=0.13, n, s(not significant).], D得点[F(3, 96)=0.09, n, s.], A-H得点[F(3, 96)=0.15, n, s.], V得点[F(3, 96)=0.08, n, s.], F得点[F(3, 96)=1.09, n, s.], C得点[F(3, 96)=0.19, n, s.], TMD得点[F(3, 96)=0.11, n, s.].

性の主効果はT-A得点[F(1, 96)=16.95, $p < 0.01$], D得点[F(1, 96)=16.10, $p < 0.01$], F得点[F(1, 96)=10.85, $p < 0.01$], C得点[F(1, 96)=18.73, $p < 0.01$], TMD得点[F(1, 96)=16.33, $p < 0.01$]に認められ、いずれも男性よりも女性の得点の方が高かった。一方、A-H得点[F(1, 96)=0.05, n, s.]とV得点[F(1, 96)=0.13, n, s.]には認められなかった。

表3 合宿期間におけるチームおよび調査スケジュール

	1日目 (POMS短縮版 1回目)		2日目		3日目		4日目 (POMS短縮版 2回目)		5日目	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後
Aグレード	オフ		移動		練習	練習	練習	試合	練習	練習
Bグレード	オフ		移動		練習	試合	練習	試合	練習	試合

	6日目		7日目 (POMS短縮版 3回目)		8日目		9日目		10日目	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後
Aグレード	練習	試合	練習	試合	練習	試合	練習	試合	練習	オフ
Bグレード	練習	練習	練習	試合	練習	試合	練習	試合	試合	オフ

	11日目 (POMS短縮版 4回目)		12日目		13日目		14日目	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後
Aグレード	練習	試合	練習	練習	練習	オフ	移動	
Bグレード	練習	練習	練習	試合	練習	オフ	移動	

表4 男性と女性における POMS 短縮版下位尺度得点および TMD 得点

		1回目 M(SD)	2回目 M(SD)	3回目 M(SD)	4回目 M(SD)		df	F
T-A	男性	41.00 (6.24)	43.00 (8.97)	44.33 (11.22)	41.56 (8.95)	性別	1	16.95 ***
	女性	51.65 (10.75)	53.00 (10.22)	51.41 (12.17)	50.06 (12.37)	時期	3	0.26
						性別×時期	3	0.13
D	男性	41.11 (4.96)	43.67 (5.85)	43.11 (6.11)	44.00 (8.62)	性別	1	16.10 ***
	女性	48.94 (6.89)	49.29 (8.24)	51.06 (11.12)	51.24 (11.19)	時期	3	0.43
						性別×時期	3	0.09
A-H	男性	44.56 (8.22)	45.11 (8.04)	47.89 (8.19)	46.22 (7.81)	性別	1	0.05
	女性	42.71 (6.07)	44.65 (7.91)	47.06 (10.99)	47.76 (11.61)	時期	3	1.22
						性別×時期	3	0.15
V	男性	50.89 (5.90)	47.33 (9.12)	47.33 (12.21)	47.67 (11.6)	性別	1	0.13
	女性	48.82 (11.16)	48.12 (9.48)	46.35 (9.88)	47.00 (8.28)	時期	3	0.41
						性別×時期	3	0.08
F	男性	42.89 (11.54)	42.89 (10.29)	43.56 (8.97)	44.00 (8.93)	性別	1	10.85 ***
	女性	43.35 (8.82)	50.47 (9.34)	53.12 (9.42)	53.35 (11.74)	時期	3	2.69 *
						性別×時期	3	1.09
C	男性	40.67 (6.08)	43.56 (8.52)	42.33 (9.86)	41.22 (8.03)	性別	1	18.73 ***
	女性	48.47 (8.02)	51.06 (10.31)	52.18 (11.79)	52.65 (13.61)	時期	3	0.51
						性別×時期	3	0.19
TMD	男性	159.33 (29.24)	170.89 (39.37)	173.89 (43.14)	169.33 (43.84)	性別	1	16.33 ***
	女性	186.29 (29.91)	200.35 (34.06)	208.47 (41.85)	208.06 (46.87)	時期	3	1.33
						性別×時期	3	0.11

POMS短縮版：日本語版POMS (Profile of Mood States) 短縮版, TMD：Total Mood Disturbance.

T-A：Tension-Anxiety, D：Depression-Dejection, A-H：Anger-Hostility, V：Vigor, F：Fatigue, C：Confusion.

*** p<0.01, * p<0.10

時期の主効果についてはF得点 [F(3, 96)=2.69, p<0.10] に有意傾向が認められたため、多重比較検定を行なった。その結果、1回目と比較して3回目と4回目の値が有意に高かった (ともに p<0.05)。その他のT-A得点 [F(3, 96)=0.26, n, s.], D得点 [F(3, 96)=0.43, n, s.], A-H得点 [F(3, 96)=1.22, n, s.], V得点 [F(3, 96)=0.41, n, s.], C得点 [F(3, 96)=0.51, n, s.], TMD得点 [F(3, 96)=1.33, n, s.] に主効果は認められなかった。なお、全ての下位尺度において、横山 (2005) により定められている「健常範囲」から外れる得点は認められなかった。

3.2. 上級生と下級生における比較

表5に上級生と下級生における1回目から4回目のPOMS短縮版下位尺度およびTMDのT得点を平均±標準偏差で示した。

反復測定二元配置分散分析の結果、全ての項目において交互作用は認められなかった。T-A得点 [F(3, 96)=0.11, n, s.], D得点 [F(3, 96)=0.42, n, s.], A-H得点 [F(3, 96)=0.07, n, s.], V得点 [F(3, 96)=1.41, n, s.], F得点 [F(3, 96)=0.28, n, s.], C得点 [F(3, 96)=0.54, n, s.],

TMD得点 [F(3, 96)=0.05, n, s.]。

学年の主効果についてはF得点 [F(1, 96)=5.77, p<0.05] とC得点 [F(1, 96)=4.60, p<0.05] に認められ、F得点では上級生、C得点では下級生が高値を示した。また、A-H得点 [F(1, 96)=3.73, p<0.10] に有意傾向が認められ、上級生が高値を示した。その他、T-A得点 [F(1, 96)=2.24, n, s.], D得点 [F(1, 96)=2.55, n, s.], V得点 [F(1, 96)=0.20, n, s.], TMD得点 [F(1, 96)=0.18, n, s.] には認められなかった。

時期の主効果についてはF得点 [F(3, 96)=2.51, p<0.10] に有意傾向が認められたため、多重比較検定を行なった。その結果、1回目と比較して3回目と4回目の値が有意に高かった (ともに p<0.05)。その他のT-A得点 [F(3, 96)=0.23, n, s.], D得点 [F(3, 96)=0.38, n, s.], A-H得点 [F(3, 96)=1.27, n, s.], V得点 [F(3, 96)=0.43, n, s.], C得点 [F(3, 96)=0.46, n, s.], TMD得点 [F(3, 96)=1.14, n, s.] に主効果は認められなかった。なお、本分析結果においても全ての下位尺度に「健常範囲」から外れる得点は認められなかった。

表5 上級生と下級生における POMS 短縮版下位尺度得点および TMD 得点

		1回目 M(SD)	2回目 M(SD)	3回目 M(SD)	4回目 M(SD)		df	F
T-A	上級生	47.43 (7.17)	47.50 (9.58)	47.07 (9.53)	45.36 (10.90)	学年	1	2.24
	下級生	48.58 (13.98)	51.92 (12.00)	51.17 (14.72)	49.17 (13.06)	時期	3	0.23
						学年×時期	3	0.11
D	上級生	46.36 (5.93)	45.71 (5.27)	45.86 (4.93)	47.36 (9.67)	学年	1	2.55
	下級生	46.08 (8.84)	49.25 (10.02)	51.17 (13.99)	50.33 (12.19)	時期	3	0.38
						学年×時期	3	0.42
A-H	上級生	44.93 (6.09)	46.93 (8.19)	48.64 (7.70)	48.43 (9.87)	学年	1	3.73 *
	下級生	41.50 (7.33)	42.33 (6.81)	45.83 (12.25)	45.83 (11.06)	時期	3	1.27
						学年×時期	3	0.07
V	上級生	51.93 (8.99)	49.79 (6.93)	45.64 (6.34)	45.50 (5.69)	学年	1	0.20
	下級生	46.75 (9.87)	45.58 (11.16)	47.92 (14.15)	49.25 (12.30)	時期	3	0.43
						学年×時期	3	1.41
F	上級生	44.29 (11.09)	50.29 (9.19)	51.79 (9.29)	53.57 (10.54)	学年	1	5.77 **
	下級生	41.92 (7.83)	45.00 (10.89)	47.50 (11.12)	46.08 (11.87)	時期	3	2.51 *
						学年×時期	3	0.28
C	上級生	45.71 (3.75)	46.14 (4.59)	46.07 (7.07)	45.29 (8.97)	学年	1	4.60 **
	下級生	45.83 (11.68)	51.17 (14.06)	51.92 (15.68)	52.67 (16.10)	時期	3	0.46
						学年×時期	3	0.54
TMD	上級生	176.79 (31.39)	186.79 (33.07)	193.79 (34.43)	194.50 (45.41)	学年	1	0.18
	下級生	177.17 (33.88)	194.08 (44.23)	199.67 (55.86)	194.83 (54.40)	時期	3	1.14
						学年×時期	3	0.05

POMS短縮版：日本語版POMS (Profile of Mood States) 短縮版, TMD: Total Mood Disturbance.

T-A: Tension-Anxiety, D: Depression-Dejection, A-H: Anger-Hostility, V: Vigor, F: Fatigue, C: Confusion.

** $p < 0.05$, * $p < 0.10$

4. 考察

本研究では POMS 短縮版を用い、夏季合宿期間中におけるチームスタッフの気分・感情の変動を明らかにし、これらに性ならびに学年がどのような影響を及ぼすかについても検討をした。その結果、夏季合宿期間中の活動が影響を及ぼしたのは、性および学年を問わず継時的な変化における F 得点の増加のみであった。また、性においては T-A 得点, D 得点, F 得点, C 得点, TMD 得点に有意な主効果が認められ、いずれも女性の得点の方が高値を示したが、全ての下位尺度および TMD 得点に交互作用は認められなかった。一方、学年においては F 得点, A-H 得点, C 得点に主効果が認められ、F 得点, A-H 得点は上級生, C 得点は下級生が高値を示した。また、全ての下位尺度および TMD 得点に交互作用は認められなかった。

過去の男女の心理特性に関する報告によると、女性は男性と比較をすると感情が変動しやすく (間宮, 1979)、情緒不安定で抑うつ傾向にあることが示されている (松村・小口, 1973)。また、日本語版 POMS を用いた研究においても女性の方が抑うつ傾向を示すとされている

(城田ら, 1998)。本研究の結果においても、男性と比較をすると女性の方が陰性尺度の得点が高値を示す傾向にあり、先行研究を支持する結果となった。また、男女間で有意差が認められた陰性尺度 5 項目のうちの 4 項目と TMD においては全ての時期において、男性よりも女性の方が高値を示した。つまり、夏季合宿期間に関わらず、日常的に男性より女性の方が気分・感情は陰性傾向にあることが示唆された。小倉・谷口 (2013) は、一般的に男性は女性と比べるとストレスへの耐性が高く、またストレスを継続させることなく、自己にてコントロールをすることが出来る可能性が高いと述べているが、本研究においても同様の理由により、日常的に女性の気分・感情が陰性傾向を示していたものと思われる。また、看護学生の実習中の気分の変化を検討した三木・前島 (2004) は、実践能力における自信のなさや患者との関わりが POMS の陰性尺度得点を増加させる要因であると示している。本研究の対象者も全て学生であり、同様の理由により POMS の陰性尺度得点に影響を及ぼした可能性が考えられる。加えて、全ての男性はラグビー競技の選手としての経験を有する一方で、女性にはその経験を有する者はいなかった。つまり、自身の競技経験がラ

グビーチームで活動することへの自信や選手との関係づくりの障壁となった可能性がある。これらは夏季合宿期間のみならず日常的なチームスタッフとしての活動にも影響を及ぼすと予測され、女性チームスタッフの気分・感情が日常的に陰性傾向にある要因の一つであると推察される。また、本研究の対象となったチームには120名以上の男子選手が所属しており、女性は日頃から多くの異性に囲まれた状況で活動を送っていることとなるが、この点も本研究の結果に影響を及ぼした要因であると考えられる。

一方、学年別においては夏季合宿期間に関わらず、日常的に上級生のF得点とA-H得点が高い傾向にあることが示唆され、下級生においてはC得点が高い傾向にあると示唆された。渋谷(2001)は対象を高校生としているものの、運動部員は学年が上がることでストレス経験が増えることを示唆しており、本研究においてはF得点とA-H得点で同様の見解を示した。F得点は疲労感および意欲・活力の低下を意味するとされているが(志賀ら, 2003; 横山, 2005)、本研究の対象となった上級生と下級生を比較するとチームスタッフとしての実質的な業務時間や量にほとんど差はない。つまり、上級生のF得点を高めている要因は業務量ではなく、その内容であると推察される。一般的にTRは知識や経験を積むことにより、実施する業務内容が変化していく(葛原ら, 2009; 日本体育協会, 2007b)。例えば、上級生になることで、テーピングやコンディショニング、他にはトレーニングやリハビリテーションプログラムの作成および指導など、直接的に選手のパフォーマンスに影響を及ぼす可能性が高い業務を務めることになる。その一方で、下級生はそれらのアシスタント的な業務が多く、主体的に直接選手に関わる機会は少ない。MGにおいては、上級生になるとチーム内だけではなく渉外的な活動を務めることも多くなる。特に所属する協会や他チームとのやり取りからなるスケジューリング、他には経理などチームマネジメントをする上で重要な役割を任せられることが多い。下級生は、それらをサポートすることを目的とし、MG間やチーム内における調整などが主な役割となる。このように上級生は下級生と比較をすると、選手やチームに直接的な影響を及ぼす可能性が高い役割を与えられており、それに伴う責任や重圧は大きくなると思われる。その結果、心理的な疲労感を蓄積しやすい状況下にあると予測され、これらが日常的に上級生のF得点を高めている要因であると思われる。また、A-H得点は怒り、敵意、苛立ち、イライラを意味するが(前本ら, 1997; 横山, 2005)、既に述べた通り、上級生は選手や他の組織など、他者と共同ならびに連携をとって業務を行

うことが多く、それらを遂行する過程で煩わしさや苛立ちを感じるようになる可能性がある。加えて、一般的に上級生には下級生の育成や指導が求められるが、その過程においては理想的な上級生らしさや指導者らしさが求められる(宇留田, 1979)。そして、これらは上級生ならではの役割であり、その難しい立場や苦悩が窺える。渋谷(2001)、土屋・中込(1998)は運動部員の不適応やストレスの原因として対人関係をあげているが、本研究においても選手やチーム外の関係者、同チームスタッフの下級生などとの対人関係が、日常的に上級生のA-H得点を高めている要因の一つとして考えられる。

下級生で高値を示したC得点は混乱や当惑を意味するとされている(前本ら, 1997; 横山, 2005)。過去の報告によると、新入部員がクラブ活動や学生生活などの新たな環境に適應するには入部後3~6ヶ月程度かかるとされており、その間に様々な心理的な問題を発症しやすいと示されている(小野里, 2017; 土屋・中込, 1998)。本研究における下級生は12名であったが、その内訳は2年生3名に対して、1年生が9名と1年生が多かった。また、対象期間は8月であり、入部後約4ヶ月が経過した頃であった。つまり、下級生は1年生の要素が強く、彼らがまだ新たな環境に適應できずに当惑している可能性が示唆され、これらが下級生のC得点を高めた要因の一つであると考えられる。

一方、継時的な変化については性および学年の両比較において、F得点に主効果が認められ、共に1回目と比較をすると3回目と4回目が高値を示した。日常と比較をすると、夏季合宿期間中は特に多くの業務がチームスタッフには求められる。具体的には、連日のように試合を行うことにより、TRには選手の健康管理や外傷・障害への対応、MGには他チームとのやり取りやビデオ撮影と編集などの負担が増える。また、普段であれば練習後は帰宅をするが、合宿期間中は夜間も時間があるため、TRは選手のコンディショニングやケアに多くの時間を割くことになる。また、同時刻に複数会場に分かれてチームが活動することも多く、それに伴う事前事後のミーティングの量も増える。また、朝昼晩の食事や補食の準備を行うことも合宿期間中ならではの活動である。他には、単純に練習回数が増えることも合宿期間中に業務量が増加する一因であると思われる。このように、チームスタッフには朝早くから夜遅くまで多くの業務が求められており、これらがF得点を増加させた要因であると思われる。また、POMSを用いて健常な男女(丸山, 2013; 小倉・谷口, 2013; 杉浦ら, 2004)や異なる学年(市原ら, 2002; 西村, 1998; 時安ら1995)の気分・感情を比較した過去の報告によると、同様の課題や

条件下であれば、F得点の変化も同様の傾向を示すことが示唆されており、本研究においてF得点に交互作用が認められなかったことと同様の結果を示している。つまり、チームスタッフを対象にした場合、合宿期間中においては同様の業務を実施していれば、F得点の変動に性差ならびに学年の差は影響を及ぼさないと考えられる。また、神田・黒田(1999)は選手を対象とし、休養を取ることが疲労感の抑制に貢献することを示唆しているが、本研究では4回目の調査の前日に休養を取り入れていたものの、F得点は減少を示さなかった。チーム活動が休みであってもTRには選手のコンディショニング、MGにはチームマネジメントなどが求められることから、合宿期間中にチームスタッフが心身ともに完全な休養をとることは難しいと推察される。チーム運営には学生スタッフを含むTRやMGの存在が不可欠であり、それぞれの役割に対する理解や尊重する姿勢がチームを構成するメンバーには求められている(平井, 2005)。しかし、Mensch et al. (2005)は指導者やチーム関係者はチームスタッフの詳細な業務内容までは理解していないことを述べており、同じチームスケジュール下においても選手とチームスタッフの活動内容は異なることと合わせて、それに伴い心理的な疲労感も異なることを予測しておく必要があると思われる。また、管理者は組織の環境や適切な休養の取得、またはリフレッシュの方法などに配慮をすることが、心身の負担を軽減するために有効であると述べているが(Eberman & Kahanov, 2013)、前本ら(1997)は、周囲の者と積極的なコミュニケーションを取り、良好な人間関係を築くことも気分・感情の改善には有効であるとしており、単に身体を休めるだけではなく、他者との交流を図るような方法も有効であると思われる。また、日常生活においてもPOMSによる陰性尺度が高値を示す者には、時期に応じた声掛けや指導などのアプローチ、また悩みを表出する場の提供が求められているが(前本ら, 1997)、未だ具体的な方策は示されていない。今後は生活環境などにも配慮をしたうえで、適切なアプローチの方法を検討する必要があると思われる。

その他、本研究においてはF得点を除く4つの陰性尺度得点およびTMDに増加は認められず、また陽性尺度であるV得点に減少は示されなかった。過去の報告によると、自身の活動に対する専心性および満足度を高めることや、活動における欲求充足により気分・感情は良好な状態に保たれることが示されている(大浦ら, 1987; 斉藤, 1981)。本研究の対象となったチームは期間中の練習や試合を予定通りに終えていたこと、また期間中の強化試合も14勝6敗と大きく勝ち越しており、チーム目

標は概ね達成されていたことが窺える。また、チームスタッフの業務においても夏季合宿期間を通じてトラブルもなく、それぞれに与えられた役割を十分に果たしていたと思われ、これらによりチームスタッフ各自が一定の達成感や満足度を得ていた可能性がある。本研究においては、この点について検証は行なっておらず、予測の域は脱しないが、自身の活動に対する満足度などが高まったことが、F得点以外の下位尺度およびTMDの変化を抑制した要因であるかもしれない。

本研究では同一チームのスタッフを対象に合宿という限られた期間のみを対象としたが、チームを構成するメンバーや時期により、結果が異なることは大いに予測される。加えて、本研究では気分・感情に影響を及ぼした詳細な要因までを検証するには至らなかった。今後は他のチームや競技、または年齢や経験値別による検討、他には縦断的調査や具体的な事例と気分・感情の関連性を検討するなど、異なる観点からも検証し、より有益な情報提供をしていきたいと思う。

5. 結論

本研究の目的は、チームスタッフを対象に夏季合宿期間における気分・感情の変動ならびに、それらに性および学年がどのような影響を及ぼすかについて検討をすることであった。その結果、以下の4点が明らかとなった。

1) 全ての下位尺度とTMD得点において、有意な交互作用は認められなかった。

2) 性の主効果においてはT-A得点、D得点、F得点、C得点、TMD得点に有意な差が認められ、いずれも女性の得点の方が高値を示した。

3) 学年の主効果においてはF得点とC得点に有意な差が認められ、A-H得点に有意傾向が認められた。また、F得点、A-H得点は上級生が高値を示し、C得点は下級生が高値を示した。

4) 時期の主効果においては性および学年のいずれにおいてもF得点のみに有意傾向が認められ、1回目と比較をすると3回目と4回目が高値を示した。

以上の結果から、夏季合宿期間中におけるチームスタッフの気分・感情については、性や学年に関係なく、疲労が経時的に高まることが明らかとなった。加えて、夏季合宿期間中だけではなく、日常的に女性の気分・感情は陰性傾向にあること、また上級生は怒り-敵意や疲労が高まっており、下級生は混乱-当惑していることが認められた。チームや組織を構成するにはチームスタッフの役割が重要であるが、その過程においては合宿期間のみならず、日常から性および学年に応じた配慮とアプローチが必要であると思われる。

参考文献

- ベースボールマガジン社 (2015) 全国主要大学チーム 2015年度写真名鑑 ラグビーマガジン11月号 別冊付録. ラグビーマガジン11月号, 44(12):89-102.
- Brooks, J. H., & Kemp, S. P. (2008). Recent trends in rugby union injuries. *Clinics in sports medicine*, 27(1): 51-73.
- Eberman, L. E., and Kahanov, L. (2013) Athletic trainer perceptions of life-work balance and parenting concerns. *Journal of athletic training*, 48(3): 416-423.
- 平井英嗣 (2005) 大学・高校チームにおける環境整備のマネジメント. *コーチングクリニック* 5月号: 32-35.
- 堀本ゆかり・丸山仁司・黒澤和生 (2011) 臨床教育に影響を与える性格的特性分析 — 臨床実習前の課題解決に向けて —. *理学療法科学*, 26(4): 541-547.
- 市原勝彦・奥本正・得本啓次・新畑茂充 (2002) 生理的および心理的指標からみた大学レスリング選手のコンディショニング. *東亜大学総合人間・文化学部「総合人間科学」* 2(1): 71-82.
- 今村嘉雄・宮畑虎彦編 (1997) 新修体育大辞典 (4版). 不味堂出版, pp.1444.
- 岩瀬洋樹・菅沼一男・高田治実・齋藤孝義・前田雄太・浅香貴広・丸山仁司 (2016) 理学療法学生の通常時と定期テスト前の心理変化について. *理学療法科学*, 31(3): 405-408.
- 神田純一・黒田稔 (1999) 夏季合宿中の疲労感と睡眠感の変動経過について. *日本体育大学紀要*, 29(1): 123-128.
- 北村辰夫・吉本俊明 (1997) POMS からみたクロスカントリースキー・ナショナルチーム選手の海外合宿中のコンディションの変化. *研究紀要*, 53: 133-140.
- 河野由美子・小泉由美・酒井桂子・久司一葉・岡山未来・坂井恵子・坪本他喜子・橋下智美・北本福美 (2013) 更年期女性へのタクティールケア介入における生理的・心理的効果. *日本看護研究学会 雑誌*, 36(4): 29-37.
- 葛原憲治・長谷川望・石川幸生 (2009) トレーナー育成における現場実習プログラムの導入. *東邦学誌*, 38(1): 15-26.
- 前本悦子・稲垣ひとみ・宮永玲子・本岡澄江・波奈津千佳 (1997) 新人看護婦のよりよい職場環境づくりの検討 (第一報) POMS を用いた気分の評価から. *看護教育*, 28: 82-85.
- 間宮武 (1979) 性差心理学. 金子書房, pp.191-228.
- 丸山章子 (2013) トランポリン競技選手における心理的コンディショニングがパフォーマンスに及ぼす影響 — ロンドンオリンピック前の心理的コンディショニング —. *金沢学院大学紀要, 経営・経済・情報科学・自然科学編*, 11: 185-190.
- 松村康平・小口忠彦 (1973) 女性心理学下. 福村出版, pp.32-62.
- Mazerolle, S. M., and Eason, C. (2016) A Longitudinal Examination of Work-Life Balance in the Collegiate Setting. *Journal of athletic training*, 51(3): 223-232.
- McNair D., Lorr M., and Droppleman L. (1971) Profile of Mood States Manual. Educational and Industrial Testing Service. San Diego, CA.
- Mensch, J., Crews, C., and Mitchell, M. (2005) Competing perspectives during organizational socialization on the role of certified athletic trainers in high school settings. *Journal of athletic training*, 40(4): 333-340.
- 三木明子・前島宏之 (2004) 看護学生における実習中の気分の変化 — POMS (Profile of Mood States) 短縮版による検討. *日本看護学会論文集 看護総合*, 35: 169-171.
- 村木征人 (1995) スポーツ・チームの組織形態とコーチの役割 — 日本の大学運動部における諸問題に関連して —. *筑波大学運動学研究*, 11: 29-43.
- 中村浩一・兒玉隆之 (2013) 学業成績の把握および学生教育管理のための POMS. *理学療法科学*, 28(2): 227-230.
- 日本ラグビーフットボール協会 (2015) 日本代表「ラグビーワールドカップ2015」最終登録メンバー. https://www.rugby-japan.jp/2015/08/31/final_squad_for_rwc2015/, (参照日2017年10月17日).
- 日本体育協会 (2007a) 日本体育協会アスレティックトレーナー養成事業. 鹿倉二郎ほか編, 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト第1巻アスレティックトレーナーの役割. 公益財団法人日本体育協会, pp.10.
- 日本体育協会 (2007b) 日本体育協会アスレティックトレーナー養成事業. 鹿倉二郎ほか編, 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト第1巻アスレティックトレーナーの役割. 公益財団法人日本体育協会, pp.13.
- 二宮寿朗 (2017) スタッフ全員証言 チーム・ハリルを追え. *Number*, 38(13): 64-68.
- 西村千尋 (1998) 短大女子サッカー選手の遠征試合前後における POMS の変化. *長崎県立大学論集*, 36(3): 1-8.
- 小倉由紀子・谷口美智子 (2013) 母性看護学実習における学生のストレス度と気分の変化の男女比較 — 唾液

- アミラーゼ値・日本語版 POMS 短縮版からの検証
— 中京学院大学看護学部紀要, 3 (1) : 43-50.
- 小野里真弓・谷口英規・畑攻・八丁茉莉佳 (2017) 大学
野球部の組織マネジメントに関する基礎的研究：基本
的な組織機能に着目して. 日本女子体育大学紀要, 47:
13-23.
- 大浦隆陽・山本勝昭・徳島了 (1987) 大学における体育
実技への専心性と気分との関係 — 評価の観点から
— . 九州体育学研究, 1(1) : 1-10.
- 斉藤良夫 (1981) 疲労 — その生理的・心理的・社会的な
もの. 青木書店.
- 洪倉崇行 (2001) 高校運動部員の部活動ストレスサーと
ストレス反応との関連. 新潟工科大学研究紀要, 6:
137-146.
- 志賀令明・阿原美生・畑山俊輝・田中俊誠 (2003) 若年
女子での POMS 各得点と他の心理検査及び IL-6 との関
連. 日本女性心身医学会雑誌, 8(2) : 169-176.
- 城田真一・上里知美・高良宏明・金谷文則 (1998) 高校
生のバスケットボール外傷における身体的, 心理的要
因の検討. 琉球医学会誌, 18(3) : 103-111.
- Stephanie M., Jennifer E. Bruening, and Douglas J. Casa.
(2008) Work-family conflict, part I: antecedents of work-
family conflict in National Collegiate Athletic Association
Division IA certified athletic trainers. *Journal of athletic
training*, 43(5) : 505-512.
- 杉浦春雄・植屋摩紀・高瀬友美子・西牧正行・石田直
章・植屋悦男・大貫稔 (2004) 福祉教育キャンプ実習
前後の学生の気分プロフィールの変化. 総合福祉, 1:
71-76.
- 辰見康剛・八板昭仁・粟谷健礼・土屋裕睦 (2017) 円皮
鍼およびプラセボ円皮鍼が夏季強化合宿期間における
大学ラグビー選手の心理的コンディションに及ぼす影
響. *理学療法科学*, 32(6) : 875-879.
- 時安利栄・圓吉夫・西条修光 (1995) アメリカンフット
ボール部の夏季合宿中における POMS の変化 — 1年
生と4年生の比較 — . 日本体育大学紀要, 24(2) :
83-87.
- 土屋裕睦・中込四郎 (1998) 大学新入運動部員をめぐる
ソーシャル・スポンサーの縦断的検討：バーナウト抑
制に寄与するソーシャル・サポートの活用法. *体育学
研究*, 42 : 349-362.
- 宇留田敬一 (1979) クラブ活動組織の基礎的研究. *学校
経営研究*, 4 : 1-14.
- 宇津木妙子 (2011) リーダーから見たチームスタッフの
在り方と育て方. *コーチングクリニック* 8月号:
24-29.
- 山口香 (2017) チームマネジメントの基本概念. *コー
チングクリニック* 2月号 : 4-7.
- Yatsuzuka, M., Wada, S., Hara, Y., Matsui, A., Komai, N.,
Yasuda, T., Yoshii, M., Tazawa, K. (2005) Psychological
characteristics after far-infrared hyperthermia evaluated
using the profile of mood state (POMS). *Thermal
Medicine (Japanese Journal of Hyperthermic Oncology)*,
21(4) : 231-236.
- 横山和仁 (2005) POMS 短縮版 手引きと事例解説. 金子
書房.

(平成29年10月24日受付)
(平成30年5月9日受理)

九州体育・スポーツ学会第67回大会
(平成30年 9月15～16日 熊本学園大学)

発表抄録集

1. 特 別 講 演

特別講演

地域貢献とスポーツ文化興隆

演 者：幸田 亮一（熊本学園大学学長）

司 会：橋本 公雄（熊本学園大学）



演者の略歴

1954（昭和29）年生まれ。熊本県美里町出身。長崎大学経済学部卒，京都大学大学院経済学研究科修士課程修了，同博士後期課程退学，京都大学博士（経済学）授与。佐賀大学，大阪経済大学での教員を経て，1996（平成8）年から熊本学園大学商学部教授。その後，産業経営研究所長，商学部長，大学院経営学研究科長を歴任，2014（平成26）年8月に学長就任（現在，2期目）。専門は経営史。

特別講演は，熊本学園大学の幸田亮一学長に「地域貢献とスポーツ文化興隆」のタイトルでお願いした。この理由は大会実行委員会として，2015年4月に発生した熊本大地震とボランティア支援活動，熊本でのスポーツ国際大会（ラグビーと女子ハンドボール）の開催，そして本学のスポーツ文化興隆運動などを考え，何か熊本らしさを出したいと思ったからである。

講演は，ご自身が登山家でもあることから学生時代からの国内・海外での登山やロッククライミングの経験や宮崎のロッククライマーの拠点の宿「庵・鹿川」とそのオーナー（73歳）の生きざまを紹介された。先生は競技スポーツの経験はないとのことであったが，実際に山に登るという目標設定とその達成への挑戦，そして登頂したときの達成感・満足感などはスポーツと合い通じるところがあるのではないかと語られた。

つぎに，ご専門の経営史に関し，ドイツの工業史・経営史の研究から現在ではドイツのツーリズム史の研究を行っていることを話された。その中で，ナチスドイツは負の側面で語られるが，労働者に対する環境整備などさまざまな配慮もして

いたことを紹介された。このことについてはまったく知らなかったことで，驚いた次第である。

1. 建学の精神と熊本地震

熊本学園大学の前身の東洋語学専門学校は教職員と学生のボランティアで立田山の麓の土地を開墾・整地し，1942年に開学したことに始まっており，建学の精神「師弟同行」「自由闊達」「全学一家」の淵源を語られた。この建学の精神はスポーツ活動にも反映され，古き時代にはスポーツ大会やクラスマッチを開催し，教職員と学生がともにスポーツに興じていた歴史を写真をとおして紹介され，スポーツの力的一端を話された。

2016年4月14・16日に発生した熊本地震においては，約700名の避難者を受け入れ，周辺の大学が支援活動を閉じる中，45日間にわたって被災者支援を行ったが，社会福祉学部の教員が中心となって多くの学生とともにボランティア活動を行った。特に，災害弱者を受け入れ積極的に支援したことが，熊本モデルとして大きくマスコミにも取り上げられた。学生たちは学内はもとより，学外でもボランティア活動を行ったが，「おひさ

まカフェ」「運動遊びボランティア」など現在も7つの学生ボランティア・グループが継続して活動をしていることを紹介された。

このように、熊本地震のときのボランティア活動には少なからずとも建学の精神が息づいていたと思われると述べられた。

2. 大学におけるスポーツ文化の興隆

本学におけるスポーツ文化の興隆は今に始まったことではなく、1970年に体育教員の指導のもと運動部活動とは別に学生代表によって運営される「スポーツ・デー」が設置され、毎週水曜日の午後に学生・教職員が一堂に会してスポーツをしていた歴史を振り返りながら、過去と現在の運動部の活躍を紹介された。近年の本学の体育系運動部活動は全国大会や世界大会にも出場して活躍をしているクラブや選手もおり、活発に活動している。また、地域におけるスポーツ活動の支援も行っており、プロスポーツのロアッソ熊本（サッカー）や熊本ボルターズ（バスケットボール）とも連携し、地域貢献を行っていると話された。

3. スポーツと人生

つぎに、スポーツと人生と題して、玉木正之著の「スポーツとは何か」、大西鐵之祐著の「闘争の論理」、キャンベル・モイヤーズ著の「神話の力」とおして、スポーツの基本は遊び（玉木）、スポーツの機能としての遊戯性、闘争性、技術性（大西）、スポーツは自然（身体）と触れ合う行為（玉木）、そして神話の機能（モイヤー）をとおして、人間とは、人生とは、スポーツとはについて言及された。特に、モイヤーズの神話の機能については、人間にとっての神話の必要性を述べられたが、神話はスポーツと置き換えて読んでもまったく遜色ないと述べ、スポーツの必要性を主張された。

最後に、九州体育・スポーツ学会に対し、「グ

ローバル人材も必要だが、グローバル人材はもっと必要である」。そのために、スポーツの持つ自主性と知性を持った人材の育成が重要であると述べ、今後の本学会の「地域貢献」と「スポーツ文化興隆」に期待を寄せられた。

<感想>

講演は非常に示唆に富んだ内容であった。学会は研究を主体とする機関であるが、現在の大学のミッションは研究、教育、そして社会貢献にあることを考えると、研究機関としての地域貢献の推進を述べられたことには意義があると思われる。2019 ラグビーワールドカップと2019 女子ハンドボール世界選手権大会、そして2020 東京オリンピック・パラリンピック大会と、国際スポーツ大会がわが国、わが九州において開催されるが、学会としても何らかの社会貢献が考えられるのではないだろうか。また、われわれ体育人はスポーツの力に鑑み、学内でも学生のアクティビティと大学の活性化に貢献することも可能であり、いま一度スポーツ文化興隆の運動を起こせたらと思った次第である。

文責（橋本公雄）



写真 講演風景

2. 全体シンポジウム

<全体シンポジウム>

スポーツによる地域の活性化

シンポジスト： 湯之上聡（熊本ヴォルターズ代表）、萩原悟一（鹿屋体育大学）
中山純治（福岡県スポーツ振興センター）
コーディネーター： 斉藤篤司（九州大学）、熊谷賢哉（長崎国際大学）

1. 企画趣旨

本シンポジウムでは、スポーツを通じた地域の活性化とは何かを考える。経済の活性化は、経済効果で示される金額や税収の増加などでイメージできるが、地域の活性化は経済効果のように定量的なものではないと思われる。

2020年のオリンピックを前に、九州においても世界大会や練習会場の誘致が盛んに行われているが、一過性ではない活性化とは何か、地域の活性化は誰がどのように評価するのか。そもそも、「地域」とは何か。「活性化」とは、何が活性化されればいいのか。このような疑問に対し、産・官・学 それぞれと民（地域）との関わりについて、実際に取り組んでいるシンポジストの方々に話を聞いた。

2. 発表要旨

「地域に夢と感動をとどけ、人のつながりを創る」

湯之上 聡氏

まず最初に、VTRを通しての活動紹介があった。『熊本ヴォルターズ』は熊本を拠点としたプロ・バスケットボールチームであり、地域やお客様と一体になることを目標にVTRを作成した。さらに、自身のこれまでの様々な人・モノ・環境との出会いの体験から、熊本にそのような環境を作りたいと思い、プロ・バスケットボールチームをゼロからスタートさせた。そして、様々な困難も体験しながら、2016年4月の地震を経て現在に至るまでの軌跡

についての話があった。

具体的なキーワードとしては、①「子どもたちに夢を」、②「熊本に感動を」、③「人のつながりを」といったことを活動の柱として掲げており、「出会いに感謝」しながら、熊本の希望の光となり、熊本（地域）に夢と感動をとどけ、人のつながりを創っていければと思い活動されているとのことであった。

今後の中長期目標としては、町の中に練習場、農作物での食堂展開、子供たちが練習している時に親が集うカフェ、トレーニング健康増進プログラム、高齢者健康増進、子供育成プログラム、仮設住宅の後活用として合宿に来た学生への提供などといったジム・カフェ・レストランおよび最終目標としてのアリーナ建設といった目標、少子高齢化にヴォルターズが一つのコンテンツとなって課題を解決していくといった構想を示した。

「地方小規模大学によるスポーツを通じた地域の活性化」

萩原悟一氏

地方にある大学が主体としてスポーツが持つ価値の最大化をはかり、地域活性化に大きく貢献することが求められるようになってきていることから、鹿屋体育大学では（1）地域×大学スポーツブランドの創設、（2）大学スポーツイベントの開催、（3）市民大運動会の開催、（4）スポーツ合宿誘致の支援、（5）NPO法人NIFSスポーツクラブの運営等を実施している。

アメリカで大学スポーツが盛んであることを目の当たりにした体験があり、大学でのスポーツ振興が「地域の活性化」に繋がっていくと思った。また、「地域の活性化はどのような尺度で考えればいいか」という疑問に対し、「地域への愛着」という視点をあげ、「愛着の高さ」が「住民QOLの高さ・居住希望意識の醸成」につながるのではないかと考えた。これまでは、大学のスポーツを通じた社会貢献が、どちらかといえば一方通行型であり、大学が主体となって提供しているものであったが、地域にとって何が必要かを共に考えて吸い上げていくような、地域とともに大学スポーツ振興を考える「相互型社会貢献」の必要性がある。さらに「大学を拠点としたスポーツ交流都市創造プロジェクト」として「する、みる、ささえる」スポーツを提示し、自らが考えたことを持続させる、楽しむといった態度が大切になるとして、さまざまな具体例を示した。

「福岡県タレント発掘事業による地域の活性化」

中山純治氏

「福岡県タレント発掘事業」は福岡県スポーツ推進計画の中に掲げている「県民に希望や元気を与える競技スポーツの推進」の具体的施策であり、子どもたちの能力を、「見つけ」「育て」「活かす」事業である。小・中学生期におけるタレント（才能）を有する人材を見つけ出し、競技団体等と協力しながら適切な指導を行い、県民に夢や感動を与える国際クラスの選手を育成する。また、参加した子どもたちが自分にあった種目を見つけ、より活躍できる可能性を拡げることができる。

平成16年度より「地域の連携の中から金の卵を見つけよう」という趣旨でこのタレント発掘事業が始まり、最初約2300人だったものが平成29年は約56000人となった。トップアスリートとしての生き方、振る舞い方などを学ぶプログラムを提供している。一次選考に申し込んだ子ども達に

は、運動能力のトレーニング情報測定値の記録、平均値などに加えて、栄養講義やこれからどのように運動に関わっていくかについてフィードバックした。さらにセレクトプログラム（2次選考、3次選考）があり、子どもの能力がいかに関現できるかを見極め、時期をのがさないことを大切にしている。

1期生（現在25～26歳になっている）の中には、怪我などで結果は出せなかったが、医療関係に勤めたり、夢を次世代の子どもに伝えるため教員やスポーツ指導者になったりしている者がいる。

また、「タレント発掘事業でエリートを選択すると選抜されなかった子はそこに参画できなくなるが、そのことは『地域活性化』とどのように関連するのか」といったフロアからの質問に対して、一次選考に来た子がスポーツを好きになっていく、受講生に「今日得た知識」を自分のチームに伝えるように指導する、そういったことが活性化の一つになりうるとのことであった。さらに、連携という観点からは、体力の低下が問題になっているが、学校単位、市町村単位で一次選考の申し込みがあり、それらが子供の体力向上につながっている可能性を示唆した。

3. 第1専門分科会シンポジウム

第1 専門分科会シンポジウム

第1部「岩崎健一先生を偲んで」

演 者：荒井 久仁子（熊本健康体力づくりセンター）

司 会：下園 博信（福岡大学）

1. 企画趣旨

九州体育・スポーツ学会に多大な貢献をされた、岩崎健一先生を偲んで、岩崎先生のメンタルトレーニング論やメンタルトレーニングへの取り組みについて、振り返りながら今後のメンタルトレーニングの在り方について検討した。

2. 発表内容

『生涯現役』と言われていた岩崎健一先生の、

有言実行の功績をみなさんで振り返ることが出来たことで、先生の指導の信念や指導の背景にあるもの、いつまでもプラクティショナーとして、現場での指導を第一にされていたことなどを改めて再認識し、私達が岩崎先生の遺志を引き継ぎながら、さらに発展させていくことで、スポーツメンタルトレーニングの今後の発展にもつなげていきたいという新たな決意をさせていただくことが出来ました。

第2部「指導者のフィロソフィー」

演 者：岩田 大助（熊本高等専門学校）、野口 欣照（有明工業高等専門学校）

司 会：萩原 悟一（鹿屋体育大学）

1. 企画趣旨

今回は「フィロソフィー」をテーマに、競技スポーツ、体育教師、健康づくり指導者などスポーツに関わる指導者が形成する指導哲学の特徴を探り、「求められるスポーツ指導者」が持つべき、指導哲学とは何かを検討した。

2. 発表内容

「社会の基本を身に着けさせること」

部活動において指導者が学生に身に着けさせることはそれぞれに異なる。私の指導は、「社会に適応する人物を育てる」ことをテーマに、学生が部活動を通じて社会の基本を身に着けることを重視している。社会の基本とは、特に「時間を守る」「挨拶返事」「上下関係」「道具を大切にする」を挙げ、これらを学生が意識せずに実施できるようになる事が競技スキルを身に付けると同様に重要

な事だと考える。

「指導者の「ソフィロフィー」ー指導者が形成する指導哲学, 求められる指導哲学ー」

「COACH」の語源は「導く者」にあると言われており, クライアントを望む所に導くことがその仕事となる。導く過程では苦しみなども生まれ, その先にある目的地に導くため, それを乗り越えさせ

るのもコーチの仕事だと考えている。それは今の「スポーツ」の指導者も同じで, 望む所に導けるだけの知識量とその過程で選手の「器」を大きくする事が出来る「何か」を指導者自身を持っているかであると考え。 「何か」は統一的なものでなく, 指導者によって異なるものであるが, その「考え」と「手段」を持ち合わせる事が現在の指導者に求められる物だといえる。

(文責: 野口欣照)

4. 第2専門分科会シンポジウム

第2 専門分科会シンポジウム

ウォータースポーツのバイオメカニクス

演 者：尾関 一将（大阪体育大学）、市川 浩（新潟医療福祉大学）
 下永田 修二（千葉大学）
 司 会：田原 亮二（名桜大学）

1. 企画趣旨

本シンポジウムは、競泳における水上動作、水中動作に関する知見をご紹介いただき、さらにウォータースポーツにおいては発展途上の種目である水中ホッケーの競技特性についてご紹介いただくことで、ウォータースポーツにおけるバイオメカニクス研究の視点について理解を深めることをねらいとした。

2. 発表要旨

「競泳のスタート研究」

尾関 一将氏

競泳におけるスタート局面の重要性について、先行研究の結果(窪,2005)を用いてスタートはレース結果を左右する重要な要素であることが示された。そして、スタート局面はブロック期、フライト期、エントリー期、グライド期の4つの局面により構造化され研究が進められており、スタートシグナルから 10m あるいは 15m の頭部通過時間で評価されることが示された。パフォーマンス向上のための条件として、先行研究の結果(本間ら,1997;若吉ら,1996)から、水上での動作に関しては、短時間でのスタート台からの足離れ、高い跳び出し速度の獲得、が重要であることが示された。

その後、近年の流れに沿ってスタート研究の解説がなされ、クラブスタートとトラックスタートの比較に関してブロックタイム、跳び出し水平速度に差異があること、スタートのエントリー方法がホールエントリーとフラットエントリーの2種類に大別されることが示された。さらに、尾関氏の研究成果から 15m 通過時間に影響

を及ぼす運動学的変量の特徴として、入水速度が高い、入水時の姿勢角が小さい、入水姿勢角と入水角の差分によって定義される入水迎え角が 0(deg)に近い、ことが示された。入水速度を速くするためには、飛距離を得るために遠くに跳ぶというより、早く水面に落ちるように跳ぶこと、スタート台上で体を前に倒しこむようにすることが動作のポイントとして示された。また、エントリーおよびグライド期における減速の抑制も重要な要素であることが指摘された。

バックプレートの導入(2009～)はスタート研究に大きく影響を与えた出来事であり、これを契機にバックプレートの影響を加味した研究が行われるようになった。従来のトラックスタートと比較して、バックプレートを用いたキックスタートはスタートのパフォーマンスを向上させることが示された。また、近年は計測装置の発達により、スタート時のキネティクスデータの測定が行われており、

跳び出し水平速度は後脚の力発揮の貢献度が大きいこと、跳び出し鉛直速度は前脚の力発揮の貢献度が大きいこと、手部の力発揮は跳び出し時に身体が上がりすぎないようにする役割を持っていること、が明らかとなっている。

最後に最新のトピックとしてバックストロークレッジの導入(2014～)について情報提供があり、既に 5m と 15m 通過タイムは有意に短くなること、従来のスタート試技に比べて、股関節の伸展速度が大きくなり、手離れ時、足離れ時の重心の鉛直速度が有意に大きくなることが研究結果として明らかとなっていることが紹介された。一方、この新しいデバイスを使用せず

に他の選手以上のスタートパフォーマンスを発揮している選手が紹介され、今後のスタート研究の一つの方向性が示された。

「クロール泳におけるキック動作の推進貢献」

市川 浩氏

導入として、本発表のメインテーマである「クロール泳のバタ足は推進に貢献するか？」と深い関わりのある2018年5月にリリースされた最新の研究成果を引き合いに出しながら、バタ足に関する基本的事項（下肢を左右交互に上下させる動作、競泳選手は結構バタ足の練習をしている、速く泳ぐために懸命にバタ足をするのはなぜか等）の確認が行われた。

市川氏が行った牽引装置を利用して推進力を計測する実験の結果を中心にメインテーマの検証が行われ、低速域でのキックは推進力を発揮できること、高速になるほど推進力発揮は困難になること、が示された。しかし、様々な速度域での検証の結果から、クロール全力泳相当の速度で、推進力を発揮することは可能であることも併せて示された。

次にクロール泳中の推進力がキック中のどの局面で発生しているのかを、足部に圧力センサを貼付して計測した実験データを用いて解説された。6ビートの場合、右足の蹴り下ろしは①右腕のグライド局面、②ダウンスイープ局面、③リカバリー局面でそれぞれ行われていることが示され、全身のローリング動作の影響によって、1回ずつのキックに流体力学的な違いがあることが示唆された。この仕組みについては、上肢による力のモーメントをキャンセルできることで、全身の水平姿勢保持に貢献していること、それに伴い、大きな推進力発揮の可能性を秘めていることが示された。一方で、ビート板を保持したキック練習では、トレーニングされにくい技術であるという技術習得上の問題点も指摘された。

最後にメインテーマに対する解答として、低速であればバタ足は推進力を発揮する高速になるほど推進力発揮は難しくなるクロール泳中の推進力発揮は十

分可能である、が示され、一方で体幹部ローリング動作と合わせた推進力発揮の技術を明らかにする必要があることがメインテーマに関する課題として残っていることが示された。

「水中のニュースポーツ『水中ホッケー』」

下永田 修二氏

まず、様々なウォータースポーツ、2020年東京オリンピック・パラリンピック種目となっているウォータースポーツについて説明がなされ、その中で(CMAS: World Confederation of Underwater Activities)、日本水中スポーツ連盟のウォータースポーツについて紹介が、実際に使用される用具を用いて行われた。

今回の発表のメインテーマである「水中ホッケー」について、その起源の説明から始まり、ルールの説明を踏まえ、2018年7月に開催された世界選手権において日本チームが初勝利を収めた様子が動画を用いて紹介された。フォーメーションや戦術の解説を経た後に、水中ホッケーに関する研究の概観が示された。マイナースポーツであるが故に関連する研究の数はやはり少ないものの、ゲーム分析、生理学的分析、バイオメカニクスの分析が行われており、今後、各分野における研究対象として発展の余地があることが示された。バイオメカニクス分野の研究としては、ゲーム分析における研究成果を根拠としてパス技術を高めるための研究の必要性が示唆され、下永田氏の研究データを参照しながら、この分野における今後の課題が提示された。特にパックを遠くに飛ばすための研究が喫緊の課題であり、パックの打動作を観点とした研究とともに、スティックの形状、性能など道具を対象とした研究も重要度が高いとのことであった。

文責：田原亮二（名桜大学）

5. 第3専門分科会シンポジウム

第3 専門分科会シンポジウム

幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」とは何か？

演 者：安田 量寛（さくら保育園），浅尾 理恵子（熊本大学教育学部附属幼稚園）
西田 明史（西九州大学短期大学部）
司 会：松本 大輔（西九州大学）

1. 企画趣旨

今年度より施行される新しい幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、「3法令」）では、「幼児期に育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が明示された。この資質・能力を育成する幼児教育の実践のあり方として、「主体的・対話的で深い学び」の重要性が指摘されている。運動遊びの実践との関連が強い領域・健康では、内容の取扱いにおいて「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」が追記されている。したがって、幼児教育の一環として展開される運動遊びでは、「運動発達への寄与」もさることながら、育成すべき資質・能力を明確にした「小学校教育（主に体育）との接続」や「子どもの遊ぶ姿に沿った計画，実践・指導，評価の一体化」も課題となる。そこで、本シンポジウムでは、今後の幼児教育における運動遊びのあり方について、3法令の趣旨に依拠しながら、実践者および研究者の立場からそれぞれ知を出し合い、総括的な議論を深めていくことを目的とした。

1. 「保育者が指導・援助する運動遊びの実態と課題—さくら保育園の事例を通して—」：安田 量寛 氏

さくら保育園は、「禅」をよりどころとした宗教的情操教育を取り入れており、「良い環境の中で豊かな感性を育む保育を通して、心身ともに健やかでたくましい子どもを育てる」を保育方針にも掲げている。

保育園における運動は、遊びの延長線上にある活

動と考え、子どもたちが各々の年齢や発達に合わせた種目を楽しみながら行うことで、身体を動かすことが好きになることを目標にしている。保育計画の中に運動遊びを明確に位置づけており、3歳児では「意欲的な活動」、4歳児では「健康への関心，体全体の協応運動」、5歳児では「健康増進とさらなる挑戦への意欲」をねらいに掲げている。プログラムは、達成目標を細分化し、準備体操，柔軟運動から徒手遊び，各種道具を用いた遊びや行事（運動会など）への連続性を持たせるように計画するなど、年間を通して様々な動作を経験できるように配慮している。指導の際には、基礎体力の向上もさることながら、小さな「できた」を皆で共有し、自信を持って取り組めるように留意している。子どもの感覚を活かした効果的な言葉がけによる活動の支援，危険箇所を除去した安全な活動環境の設定や安全に関する約束事の設定と伝達にも配慮している。

運動遊びの実践を通して、他児の動き方を一生懸命観察しながら〈できる〉やり方を見出そうとする姿，子ども同士の教え合う姿が観察されるようになった。また、成果を発表する機会（具体的な実演，活動時の写真も含む）やご褒美カードの活用により，できたことに自信を抱く子どもの姿も見られるようになった。このような実践が「できなくても何回も挑戦する」「繰り返し取り組みできないことができるようになる」の喜びを感じる機会になっている。

さいごに、「実践時における子どもの視野の再現」

「動きのコツの視覚的な理解」を可能にする ICT 機器を用いた指導法の開発，子どもが感覚的に理解しやすい言葉がけの検討が今後の課題である。

2. 「学びをつなぐ教育課程-幼児期にふさわしい評価の在り方を探る」：浅尾 理恵子 氏

熊本大学教育学部附属幼稚園では，保幼小接続を考える視点として，幼児期の教育を「学びの芽生え」，小学校教育を「自覚的学び」の時期とそれぞれ考えた。そして，幼児教育の改善，質向上にむけた一連の取組 (PDCA サイクル) のうち「評価」に着目し，幼児期にふさわしい評価のあり方を検証している。幼児教育における評価とは，幼児一人ひとりの良さや可能性を把握し，指導内容や方法の工夫・改善に資するものでなければならない。さらに，小学校に引き継ぐ際，わかりやすく伝えるためにも，評価には妥当性・信頼性が必要である。

評価指標の作成に際し，「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿 (10 の姿)」の視点に基づき，幼児の実際の姿から経験している内容 (=「発達の姿」) を読み取り，時系列に並べることから始めた。列記した「発達の姿」と幼児の実際の姿を紐づけながら，実情に鑑みて「幼稚園修了時の具体的な姿」を検討した。導出した「修了時の具体的な姿」を発達の道筋に沿って並べることにより 10 の姿のそれぞれに応じた評価指標を作成した。作成した評価指標の活用の際に，①教師が幼児の姿を細やかに捉えるための手がかりとする，②幼児のよさや可能性を捉えるものとする，③設定したすべての項目に印がつくわけではない，④幼児のよさや可能性を具体的な姿で書き加える，⑤発達の見通しを持ち指導内容を工夫・改善する際に参考にする，⑥各園の実情に応じて活用時期・回数を検討する，の 6 点を留意事項とした。小学校との接続に関しては，「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を視点として記入し，幼稚園での姿がよりの確に伝わるよう，写真を添えた。

評価指標の作成・活用により，実態から発達の読

み取りが適切になった。また，幼児の姿を多面的に捉えることが可能になった。今後は，評価指標を使用しやすくするための枠組みや文言の検討，評価を活かした指導内容の工夫・改善，小学校との連携におけるより良い評価のあり方が課題である。

3. 「子どもの遊ぶ姿から“主体的・対話的で深い学び”を捉える」：西田 明史 氏

2018 (平成 30) 年 4 月 1 日から施行されている 3 法令では，「幼児教育全体を通して育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が新たに示された。資質・能力は，幼児教育から小学校以上の教育までを貫く柱だと考えられている。幼児期の終わりまでに育って欲しい姿は，幼児教育全体を通して資質・能力が育まれた「小学校就学前の姿」と想定されている。これからの幼児教育では，資質・能力の育成に向け，「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を踏まえた教育課程が編成され，子ども理解に基づいた省察と評価による教育活動の質向上を図りながら，遊びを通した総合的な指導が展開される。小学校教育では，「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を考慮した上で，保幼小接続に向けた具体的な教育課程編成と授業実践が求められる。

新しい時代に必要な資質・能力を育成する教育実践のあり方として，「主体的・対話的で深い学び」の重要性が指摘されている。運動遊びへの能動的参加を促す指導方略について，「幼児教育部会における審議の取りまとめについて (報告)」を主要資料，運動学習およびインストラクショナルデザインに関する諸理論を参考資料に用いて検討した。遊び時に表出する行為を子どもの視点に立って解釈すると，幼児が運動遊びに取り組む際には，遊びと「出会い」，「確かめる」「選ぶ」「作る」「思う」「挑む」「感じる」「探る」「わかる」「試す」「できる」行為を螺旋的・反復的に繰り返すことができるような実践・指導が必要だと考えられる。

6. 第4専門分科会シンポジウム

第4 専門分科会シンポジウム

健康づくりの現場と研究

演 者：松原 建史（㈱健康科学研究所）

山本 直史（愛媛大学）

司 会：東恩納玲代（名桜大学）

1. 企画趣旨

健康づくりの現場では、科学的根拠に基づいた健康づくりの実が必要である。また、健康づくりの実践で得られた知識やノウハウを蓄積し、さらに健康づくりの現場へ還元し、効果的に活用することが重要である。そのためには、得られた知識やノウハウの有効性を科学的に検証するための実践研究が望まれる。今回のシンポジウムでは、健康づくり支援を行いながら研究を続けている、松原建史先生（㈱健康科学研究所）と山本直史先生（愛媛大学）にご登壇いただき、健康づくりの現場で行う研究について現状と課題を明らかにし、健康づくりの現場における実践研究の方法や注意点についてフロアとの議論を深めることを目的とした。

2. 発表内容

松原先生には、「健康づくりの専門職能」の組織を確立するという立場から、大学と比較して研究面では様々な限界がある業務の中で、健康づくり支援を常に研究的な視点でみつめ、事業の効果を科学的に実証し改善を図るために取り組まれてきた内容をご講演頂いた。はじめに、主な業務内容、会社理念、契約の流れや仕組みをご説明頂き、業務委託や指定管理で運営している施設での研究内容、地域で行っている健康づくり事業についてお話を頂いた。次に、企業経営のために契約を取り続けながら、施設や教室の運営を行わなければならない状況で、期待されている成果をだすために取り組まれている研究をご紹介頂いた。自治体が健康づくり運動に期待していることは、医療費や介護費の適正化、健康

寿命の延伸であるが、費用対効果を考えると健康づくり事業は最初にやり玉にあがる分野である。トレーニング室の運営費用や利用人数が懸念される中で、医療費分析や健康づくりの脱トレーニングなどの研究をされているとのことであった。中でも、健幸たすきを隣の人につなげよう（チェーン・ウォーキング）の取り組みはととも興味深かった。自主性・主体性を育み、自立・自律を促すために、現場のニーズに対応しつつ、長い目でみた支援の高度化を目指していくことが必要であるとされた。

山本先生には、「地域貢献」を一つの使命とする大学教員という立場から、地域貢献のみに注力することができる環境ではない中で、健康づくり支援などの地域貢献を主とした活動への教育と研究のリンゲージを模索するために取り組まれてきた内容をご講演頂いた。はじめに、愛媛大学社会共創学部の理念をご説明頂き、現在連携を深めているM市シルバー人材センターをフィールドとした活動についてお話を頂いた。連携事業においては、現場担当者、参加者、そして研究者の想いの摺合せが重要であり、研究者が望む全ての測定値を得ることは不可能である。特に質問紙調査において研究者は「とりあえず聞いておこう」という項目も採択しがちであるが、交絡因子か中間因子を見極めることや交絡因子の取捨選択によって必要最低限のデータの取得に留めることの必要性が説明された。また、現場との関わりによって生まれたアイデアを論文化していくためにご自身が取り組ま

れた量的・質的研究のプロセスについて解説があった。
講演の中で終始、現場の邪魔にならないように細く、

長く、緩やかに研究をすすめていくことの重要性を強調された点が印象的であった。

7. 第5専門分科会シンポジウム

第5専門分科会シンポジウム

障がい者スポーツにおける競技力サポートについて

演 者：高橋 恭平（熊本高等専門学校）、甲木 秀典（西九州大学）

司 会：池上 寿伸（佐賀大学）

1. 企画趣旨

本シンポジウムにおいては、ハンディキャップスポーツの多様性の中で、トップパフォーマンスの強化育成に携わっておられる指導者の方をシンポジストに迎えることができました。そして、障がい者スポーツにおける競技力サポートの現状と課題について実りある論議をすることができました。講演要旨を以下に示します。

高橋先生より①競技戦略に科学的戦術を適用し課題達成する重要性について、走レースを例に紹介がありました。甲木先生は現在までの②パラスポーツにおける医科学サポートの内容紹介がありました。さらに両先生より③日常の選手支援課題や指導者不足に説明がありました。その後、フロアへの逆質問を交え④医科学指導サポート体制の重要性と障がい者スポーツの動機づけ課題等について展開されました。東京五輪以降を含むパラスポーツサポートのあり方や医科学視点からのコーチングの重要性を示唆する貴重な場となりました。（文責：佐賀大学・池上寿伸）

2. 発表要旨

「オリンピック競技科学スタッフの立場から
考えるパラアスリート競技力向上支援」

高橋恭平氏

私は日本陸上競技連盟科学委員会委員および日本オリンピック委員会強化スタッフとして、現在オリンピック陸上競技短距離種目トップアスリートの科学支援に従事しています。主に、国内

外の主要競技会においてレース中の走パフォーマンスを測定分析し、選手・コーチへフィードバックする中で競技力向上を図ることに従事しております。これらの経験を元に、本シンポジウムでは、3つのテーマについて話題提供させて頂きました。

1. オリンピック陸上競技強化および支援体制について。種目毎にゴールドターゲットやメダルターゲット等、複数のカテゴリーに分けた選手強化が図られており、科学支援についてもそれに準じた支援体制を整備しています。
2. 我々が実際に実施している科学支援について。測定方法や分析結果、フィードバック内容等を紹介し、特に今、注目度の高い男子4x100mリレーの支援についてもお話ししました。
3. パラアスリートの競技力向上支援の現状と課題について。指導者やトレーニング環境、パラアスリートのリクルートに着目して、このような科学支援に従事する立場から、私自身が感じていることをお話し致しました。

「障がい者スポーツのトップアスリートへの競技力向上支援の現状と課題」

甲木 秀典氏

まず、日本パラ陸上競技連盟強化委員として行っている選手サポート内容を紹介しました。

ここ近年、強化指定選手へのコーチングを中心に、メディカル、栄養、フィジカル、メンタル、映像などの医科学的サポートが充実しています。

サポートを領域ごとに整理してみるとオリンピックレベルの充実性に近づいてきています。パラスポーツでは、特にメディカル面の配慮が必要になりますが、それ以外の領域のサポート内容ではレベル差の縮まりが分かってきました。

次に今後の課題について、どこまで選手のフォローアップができるか、ということと指導者の問題を提起致しました。近年充実しつつある医科学サポートを合宿等で受けた選手が地元に戻った後、通常のトレーニングで必要とするサポートを受けられないといったことが選手の声としてあ

げられています。競技力向上のためには継続したサポートが必要と考えますが、ここに一つの課題があるように思います。

この課題を解決するにはまず、指導者の存在が必要であります。障害を十分に理解した上でパラスポーツを熟知し、医科学的サポートのできるパラアスリート指導者の数が非常に少ないことです。東京 2020 まであと 2 年と長くありません。このような環境を整備していくことが競技力の向上、ひいては東京以降の日本のパラスポーツ界の発展につながっていくものと考えます。

8. 研究推進委員会企画テーマ 1

運動部活動が大学生のメンタルヘルスと生活習慣に及ぼす影響

須崎康臣（島根大学），斉藤篤司，杉山佳生（九州大学）

キーワード：縦断調査，大学新入生

1. 目的

本調査は，運動部活動の所属が大学新入生のメンタルヘルスと生活習慣の変化に及ぼす影響とそれらの因果関係について検討を行うことを目的とする。

2. 方法

調査は2017年4月から2017年7月にかけて，月1回の調査を計4回実施した。調査内容は，メンタルヘルス (MHP-1) と生活習慣 (DIHAL.2) であった。調査対象者は，大学新入生140名を対象とした。なお，分析対象者はTime1において，運動部活動に所属していない者であり，4回分の調査での欠損がない73名を対象とした。その内訳は，Time2以降継続して運動部活動に所属している者（以下，所属群）が35名，調査を通して運動部活動に所属していない者（以下，非所属群）が38名であった。

3. 結果

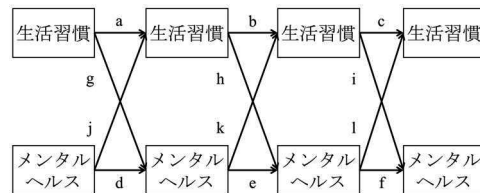
分析の結果，所属群においてTime1の生活習慣からTime2の生活習慣に有意なパスは確かめられなかった。また，SCLと生活習慣との関連について，非所属群は時期によって交差遅れ効果が有意であったが，所属群において有意な交差遅れ効果は確かめられなかった。

4. 考察

まず，所属群は，Time1からTime2への生活習慣の安定効果が有意ではなかった。これは，運動部活動に所属する学生において，4月の生活習慣から5

月の生活習慣を予測できない可能性を示唆している。大学新入生は，大学に入学することによって大きな環境の変化を受ける。そのため，その環境の変化に応じて生活習慣を構築していくことが考えられる。しかし，運動部活動に所属する学生は，学業を中心とした生活習慣を構築するのではなく，これに運動部活動の活動も踏まえた生活習慣を構築する必要がある。したがって，運動部活動に所属する新入生は，入学してから1ヵ月間の生活習慣は安定しておらず，5月以降から安定した生活習慣を構築できている可能性が考えられる。

また，所属群は，SCLと生活習慣との間に交差遅れ効果が確かめられなかったが，非所属群は，時期によって効果が有意であることが確かめられた。これは，運動部活動に所属する新入生において，精神的ストレス，身体的ストレス，社会的ストレスから構成されるSCLと生活習慣との間に因果関係がないことが考えられる。一方で，運動部活動に所属しない新入生において，時期によって生活習慣とSCLは因果関係を有する可能性が推察される。



誤差変数と共分散は記載せず

図1 分析に使用した交差遅れ効果モデル

表1 メンタルヘルスと生活習慣の影響の因果関係

		安定効果						交差遅れ効果					
		パスa	パスb	パスc	パスd	パスe	パスf	パスg	パスh	パスi	パスj	パスk	パスl
生きがい	所属群	—	.78	.66	.40	.57	.59	—	—	—	—	.19	—
	非所属群	.35	.74	.79	—	.66	.61	.35	.23	—	.35	.21	—
SCL	所属群	—	.74	.74	—	.60	.65	—	—	—	—	—	—
	非所属群	.38	.74	.76	.47	.68	.67	—	—	-.24	—	-.21	—

5%水準で有意なパスのみを記載

9. 研究推進委員会企画テーマ2

予測不可能条件における素早い方向転換動作と部活動指導者の評価との関連性

—大学女子バスケットボール部を対象として—

亀田麻依, 木葉一総, 前田 明 (鹿屋体育大学)

キーワード: 予測, 判断, VAS, サイドステップ

1. 目的

本研究は, ディフェンス場面におけるサイドステップテストと指導者の評価との関係を明らかにすること, および, 予測不可能条件における素早い切り返し動作の特徴を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

対象者は, 大学女子バスケットボール選手 12 名とした。本研究では, 右方向へサイドステップを行い, 3 m 地点に設置されたモニタに表示される矢印に従って, 直進か切り返しかを瞬時に判断する方法を用いた。すなわち, 右方向の矢印 (→) が表示された場合には, 3 m を通過するまで右方向へのサイドステップを続けた。一方, 左方向の矢印 (←) が表示された場合には, 3 m 地点で切り返し動作を行い, 左方向へサイドステップで 3 m 戻った。移動方向を示す矢印は, スタートから 2.5 m 地点に設置した光電管を先行足が通過するタイミングで呈示した (亀田ら 2017)。サイドステップ動作は, 光学式 3 次元動作解析システムにて撮影し, 切り返し足の床反力は, フォースプレートにて取得した。条件は, 呈示する矢印の方向を予め対象者に通知する予測可能条件 (PRE) および通知しない予測不可能条件 (UN) とした。サイドステップテストから, 1) サイドステップ, 2) 反応, 3) 予測と判断, 4) 切り返し, 5) 総合的なディフェンスの 5 項目をディフェンスの評価として算出し, 偏差値化した。一方, 指導者 (監督歴 41 年, コーチ歴 3 年) は, Visual Analog Scale を用いて上記の 5 項目の主観的評価を行った。2 人

の評価を合計し, 偏差値化した。

3. 結果および考察

PRE では, サイドステップ ($r=.70$), 切り返し ($r=.55$) において, 指導者の評価と高い相関関係がみられた。一方, UN では, サイドステップ ($r=.36$) において, 中程度の相関関係がみられたが, 他の項目の効果量は小さかった。しかしながら, UN における, 切り返しの項目に関しては, 指導者の評価が特に高かった一部の選手を除くと, $r=.86$ であった。つまり, 一部の選手においては, 本研究のサイドステップテストでは測ることのできなかつた能力を有している可能性が考えられる。Lee ら (2017) は, 矢印課題 (UN) よりも映像課題の方が, 競技レベルが高い選手の能力を示すことができると報告している。本研究における, 特に評価が高い選手は, 競技特有の予測のための情報収集能力, すなわち, オフェンス選手の情報を読み取る能力が優れていた可能性が考えられるが, 本研究の矢印課題ではその能力を活かすことができなかつたと推察される。以上より, サイドステップテスト (UN) は, 指導者の評価を概ね反映することが示されたが, 特に評価の高い選手を測定するときには, 注意が必要であると考えられる。

UN の切り返し動作において, 指導者の評価が高い選手 2 名と, 低い選手 2 名を比較した。その結果, 評価が高い選手は, 低い選手よりも体幹を切り返す方向へ傾け, 切り返し脚の股関節をあまり屈曲せず, 短い接地時間で大きな力を発揮していたことが明らかになった。

10. トピック・セッション1

これからの保育者・教員養成のあり方を考える

演 者：瀧 信子（福岡こども短期大学）、中島 憲子（中村学園大学）
 松本 大輔（西九州大学）
 司 会：谷川 裕子（純真短期大学）
 企 画：第3専門分科会自主企画
 西田 明史（西九州大学短期大学部）、松本 大輔（西九州大学）

1. 企画趣旨

昨今、大学教育では、「何を学んだか」ではなく、「何を身につけ、何ができるようになったか」が重視され、学生の視点を取り入れた授業の設計と運営が求められている。保育者・教員養成に目を向けると、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上」（中央教育審議会、2017）において、教員養成段階における教育の充実に向けた改革と取組の推進の重要性が述べられている。このような乳幼児期の保育・教育や学校教育を取り巻く環境の変化や社会的要請に対応するため、これからの保育者・教員養成には、「主体的で協働的な遊び・学びの展開」「ICTの活用」などの新しい指導力の養成が求められる。

本セッションでは、保育者・教員養成系大学・短期大学における専門教育科目について、学修成果を高める「学生の学び方—教員の教え方」の方略、学修到達目標の設定と評価、専門領域の研究成果を活用した授業内容・教材の工夫、などに関する情報の共有を図った。また、保育者・教員養成に関する政策や社会的要請の動向にも鑑み、これからの教育・保育を担う人材に必要な資質能力の育成に向けた論点を整理した。

〈文責 西田明史〉

2. 発表要旨

「これからの保育者・教員養成のあり方を考える」

瀧 信子氏

「保育者養成における学生の授業理解度を高める教授方略（学修到達目標の設定と評価、専門領域の研究成果を活用した授業内容・教材の工夫等）」という視点に沿って、本学の取り組みを紹介した。

本学の学生は、2年間という短い期間で保育士資格・幼稚園教諭2種免許状を取得し、保育所・幼稚園等に就職する。2年間のカリキュラムを通して、保育に関する知識を深め、保育者として必要な指導技術や技能（指導力）を身に付け、卒業時には自信を持って子どもの前に立てることを学修到達目標として学習を積み重ねている。教員は、学生一人一人の資質向上に繋がる授業を展開し、その指導にあたっている。

本セッションでは、運動遊びや身体表現遊びに関する授業科目間の連携・接続について、各授業科目のシラバスを紹介した。その中から、「身体表現指導法」と「保育方法論」の授業を取り上げ、保育所や幼稚園で実践されている内容（ダンボール遊び・新聞紙遊び・絵本を利用した遊び等）を活かした授業を紹介するとともに、その授業の展開方法として模擬保育形式を活用していることを伝えた。模擬保育は、指導モデルを示す機会にもなり、教員自身が保育者役、学生が幼児役として展開している。模擬保育終了後には、活動内容や流れ、指導法等についての振り返りを行い、学生の気付きを引き出し、その後の学生自身の指導力向上に繋げている。また、模擬保育の実践を基に、指導案作成についても説明を

加えている。さらに、保育者の言葉かけが、幼児のイメージや動き等に影響する研究結果を、学生同士で行う模擬保育に活かせるように助言を行っている。

「学生自身の体育授業観を問い直す-「望ましい授業」のために何を何で教えるか-」

中島 憲子氏

“教員養成大学・学部というところは、教職を志望する学生にとって教師として成長していくプロセスの「入り口」、つまり教師として求められる「実践的指導力」の準備を担う機関である”（2005 海野）という認識からも、教員養成学部を卒業する際は、そのときの学校教育に対応できる十分な指導力を兼ね備えて卒業するというわけではなく、赴任先の先生方と同僚性をもちながら、着実に一歩ずつ子どもたちと向き合える教師へ、そして工夫と創造ができる授業への取り組みへと成長していくもの、と捉える必要がある。しかしながら現在では、大学での学びよりも実際の学校現地での学ぶ体験を通して、様々な経験の積み重ねを要求し、すぐに対応できる教師の育成が重視されている傾向があるように思う。本来は、教員養成学部といえども、専門職に限った学修のみが良い教師を産むとは限らず、一人の人間として豊かな青春期の経験とともに、教職に関する専門的知識もしっかりと享受できる学生の育成が重要であろうと思われる。そこで本報告では、教員養成学部における教科教育法の展開方法とそこで得られた成果と課題を例示しながら、教員養成学部が担うべき役割について以下の流れについて紹介した。つまり、教員養成校では教育の持つ不易流行の考えを再考することが肝要であるように思われる。

①30 コマ全体を貫いたカリキュラム構成、②体育科の存在価値を問う（現在の教育観を体育から再考する契機）、③「矛盾」の発生と「問い」の再生成、④「教科内容」と「教材」との関係（何を何で教えるのか、を理解する）、⑤模擬授業から基礎・基本と望ましい授業のための教授方法を学ぶ（「過程的評価」

の事実に基づく省察を繰り返す）、⑥1 コマ目の原点に戻り、自己の成長を実感する

「社会的要請と教員養成を考える」

松本 大輔氏

本発表では社会的要請とこれからの教員養成について話題提供を行うことで今後の保育士・教員養成の在り方について考える視点を検討することとした。

大きくは二つの文脈から話題提供を行った。一つは現在の教員大量採用時代における若手教員の研修や若手教員に求められる役割について。そしてもう一つは社会変革と教育の役割についてである。

佐賀県の教員の年齢構想の分布はこれからの10年後に50歳代以上と40歳代以下という二極化になることが予想される。この予想は全国的にも同様の傾向にあると思われる。つまり10年後は充実期として学校運営を推進すべき40歳代が不足するため、30歳代から中堅以上の資質を育成する必要がある。具体的には10年研の見直しとミドルリーダの育成の必要性である。このことは20歳代後半又は30歳代から資質能力によっては学校の運営としてのミドルリーダとしての育成が必要となるということである。教員養成段階からこの課題を引き受け、少しでも資質能力の高い教員の養成が求められると言えよう。さらに、教育公務員特例法等一部改正を受け、各都道府県では教員としての資質の向上に関する指標が策定されている。この中には採用前の養成期における指標もあり、今後の教員養成段階では各都道府県の求める採用前の養成期の指標を踏まえた教員養成が求められると考えられる。

同時に Society5.0 や Education 2030 等の社会変革とこれからの教育から考えると、これまでの知識伝達型の教員養成の在り方ではなく、自ら考え主体的に行動し、責任を持って社会変革を実現していく力としての Agency といった資質能力の育成を図る教員養成への転換が求められる。

11. トピック・セッション2

大学スポーツの振興と企業連携

演 者：田中秀明（東亜道路工業株式会社）、大賀博文（株式会社スポーツフィールド）
 萩原悟一（鹿屋体育大学）、今村律子（福岡大学）
 企画・司会：池田孝博（福岡県立大学・大学スポーツ振興九州地区検討会）

キーワード：大学スポーツ，日本版 NCAA，産学連携

1. 企画趣旨

日本版 NCAA の創設に向けて，現在，スポーツ庁，全国大学体育連合，関係学会および各大学において，様々な取り組みや議論がなされている．大学スポーツの振興には，学生アスリートおよび大学運動部による競争性，大学スポーツとしての文化性に加え，スポーツ・ビジネスの視点を欠くことはできない．特に，大学と企業の連携は，大学スポーツの発展に不可欠な要素である．そこで，企業と連携してスポーツ振興を行っている大学の事例紹介とともに，ソフトとハードの面から大学スポーツに関わってきた実績を有する企業側から提言をいただくことを目的として，本セッションを企画した．

2. 発表要旨

1) 企業からの話題提供

東亜道路工業㈱は，これまで大学のスポーツ施設としての野球場・サッカー場や「みる」スポーツのための簡易スタンド等の建設を行ってきた実績がある．また，大学との連携による商品開発も行っている．近年の取り組みとして，廃校施設を利用したスポーツセンター計画が進められており，Jリーグ等のプロスポーツや大学と地域（自治体）をつなぐ「ハブ（結節点）」として役割が期待されている．㈱スポーツフィールドは，体育会学生のキャリア教育・就活支援の実績を有し，近年では，教員やスポーツ指導者に進路が偏りがちな学生に，「みる」「支える」スポーツに関わる進路

開拓や，独自の手法でスポーツをする意味等の自己分析を重要視した講座を実施している．このような支援は，高校生選手のリクルートにも関係し，大学が行うべき学生アスリートのキャリア形成に寄与する業務と思われる．

2) 大学からの情報提供

メリットなく大学スポーツに投資する企業は無いが，大学の価値が競技力だけにあるとは限らない．鹿屋体育大学の萩原氏によれば，公共性がある大学という存在によって，公益性のある社会貢献が行われ，それが地域社会に有益な情報であると判断されることで，メディアが注目し，メディアに注目されることで，企業の投資価値が生じてくる．今回話題提供していただいた鹿屋体育大学と福岡大学は，地方の国立単科大学と私学の都市部大規模総合大学という異質な存在であるが，共に大学の特性を活かした，公益性のある地域貢献に学内のスポーツ振興をリンクした諸活動に取り組んでおり，今後スポーツ振興を目指す大学にとって参考となる点が多いと思われる．特に福岡大学では，現在，ミズノ㈱との提携事業が進められており，今後の展開が注目される．

3) まとめ

今回は，大学スポーツの振興に前向きな企業2社と，学内で積極的にスポーツ振興に取り組んでいる2大学から貴重な情報提供をいただいた．しかしながら，九州地区全体を見渡すと，各大学での取り組みや教員の

意識など、大学スポーツ振興に向けた機運が高まってきたとは言い難い。大学スポーツを盛り上げていくためには、まず個々の大学が学生スポーツの改革に取り組み、次にそれらの大学が力を合わせて地域としての活動を活性化していく必要がある。

今回のセッションにおける反省等を踏まえて、今後も大学スポーツ振興九州地区検討会として、本学会及び九州地区大学体育連合研修会の場を利用して、継続的な情報発信を行っていきたい。

12. トピック・セッション3

武道教材の授業実践モデル

演 者：檜崎 教子，本多壮太郎（福岡教育大学）

企画・司会：則元 志郎（熊本大学）

1. 柔道教材について

・学校体育の武道で何を教えるのか

柔道の稽古には、受け身、乱取り（自由練習）、試合、形の4項目が挙げられる。初心者のみならず熟練者にとっても、受け身と形を身につけることは重要である。

・受け身を習得する利点について

受け身を習得することは、柔道による怪我や重大事故を回避させ、その他の体育実技でも起こりうる接触による転倒などの怪我の回避にも有用である。さらに、取りと受けがお互いに協力することで、崩し・つくり・掛けという柔道における技の理合いを学ぶことができる。

・投の形を習得する利点について

投の形では、手技・腰技・足技を各3本ずつ左右交互に実施するため、左右の技術が習得できる。また、下がりながらかける払い腰や支え釣り込み足、踏み込みながらかける背負い投げや浮き腰、横に移動しながらかける送り足払い、回りながらかける内股など、基本の体さばきを習得することができる。

・柔道の単元計画と学習の流れ

表1に、柔道の単元計画と学習の流れを示した。福岡県内のK中学校における柔道の授業内容では、第1学年では固め技を中心に学習し、投げ技は第2学年になってから習得しているのが現状である。

表1 柔道の単元計画と学習の流れ（第1学年9時間の具体例）

→ 単元の展開(時間)

区分 時間	はじめ		なか①		なか②				まとめ
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	礼法 本時のねらいの確認 準備運動 体ほぐしの運動(回転運動、四肢を使った歩行運動)								
10分	●オリエンテーション		●受け身の習得		●かかり練習による技の理合いの習得			●実技試験	●発表会
20分	武道の特性 礼法 歴史 柔道衣の扱い方		後ろ受け身 前回り受け身		1.【基本編】体さばきに着目した練習法 ①下がりながらかける技 膝車 支え釣り込み足 ②踏み込みながらかける技 大外刈り 小内刈り 2.【応用編】体さばきに着目した練習法 ①横に移動しながらかける技 送り足払い ②回りながらかける技 体落とし 大腰			技能評価 1. 受け身 横受け身	相互評価 自己評価 教師の評価
	●受け身の習得		●固め技の導入						
30分	横受け身 横転受け身		1. 固め技の基本動作 ①姿勢 ②攻撃 ③防御 ④攻め方 ⑤返し方 2. 基本となる固め技の習得 ①けさ固め ②横四方固め ③上四方固め 3. 固め技の約束練習 ①抑え込み姿勢から攻防 ②組み合う姿勢から攻防		●固め技の自由練習 簡単な試合			1. 受け身 横受け身	●まとめ
	●投げ技の導入								
40分	1. 基本となる投げ技の習得 ①支え技系:膝車 ②回し技系:体落とし 2. 難易度をステップアップ 膝つき姿勢→立ち姿勢				自由練習の延長として簡単な試合を扱う ※背中合わせの姿勢から攻防			2. 投げ技 膝車	感想文の記入 課題を明確化する
50分	本時のまとめ 整理運動 相互評価 自己評価 教師の評価 次時の確認 黙想 礼法								

↓
授業の展開(分)

13. ラウンドテーブル・ディスカッション

ラウンドテーブル・ディスカッション

自己成長，学修成果を導く大学体育 —挑戦的課題達成型授業の有効性と実践—

話題提供：西田 順一（近畿大学），木内 敦詞（筑波大学）
藤原 大樹（保健医療経営大学）
企画・司会：西田順一（近畿大学）

キーワード：大学体育授業の質保証，保健体育授業の三元論的・相互干渉モデル，経験学習モデル，授業研究

1. 企画趣旨

いわゆる大綱化から四半世紀以上が過ぎた現在も大学体育は選択化，再必修化，取得単位数等，大学や時代により変化を強いられている。これには各大学の事情や学生の実態等が絡んでいる。しかしながら，カリキュラム編成上，大学体育が欠かすことのできない必須科目であれば変化は稀と考えられる。

本RTDでは自己成長や学修成果獲得のための観点として，「挑戦的課題達成型授業」に着目した上で，その有効性と実践についての記事提供を行い，大学体育を担う多くの先生方との議論を行なった。

2. 発表要旨

「学修成果にリンクする『挑戦達成』経験：「挑戦的課題達成型」大学体育授業へのシフトを目指して

西田順一氏

データマイニングにて大学体育授業の学修成果

(PBS-FYPE：西田他，2016)への要因を探索したところ，「大学体育実技経験尺度」における「挑戦達成」経験が学修成果の重要な鍵となる結果が得られた。‘これまでになかったことのないプレーや技に挑戦し，うまくいったことがあった’‘自分にはできないだろうと思っていたことができたことがあった’等の経験を‘よくあった’と受講者が実感できるほどまで，できるだけ多く積ませるような授業展開を行うことで学修成果にリンクする可能性が示唆された。今後，その具体的な方法を詳細に検討する必要性が示された。

「挑戦的課題達成型授業に向けた授業設計」

木内敦詞氏

筑波大の教育宣言（筑波スタンダード）の1つ，教養教育スタンダードにおいて，体育と芸術はヒューマニティ，すなわち，専門に偏ることのない豊かな人間性と高い倫理の涵養を担う科目として位置づけられている。筑波大の前身，東京高師の校長を長期務めた嘉納治五郎の言葉「順道制勝」は，よく戦うことこそスポーツの価値であることを伝えるものである。現在，順道制勝の態度を学ぶことを挑戦的課題として位置づけた授業に取り組んでいる。授業終了時の振り返りを学生に丸投げするのではなく，1) 授業での具体的経験や出来事を文言整理し，それを意味づけ，教訓としてまとめることで，今後のより良い思考や行動を導くよう教員が誘導することや，2) これらを個人で完結させるのではなく，他者と共有する場を設定すること，の重要性を述べた。

「レジリエンス向上を目的とした挑戦的課題達成型授業の実践」

藤原大樹氏

大学体育授業における挑戦達成経験は学生のレジリエンスを向上する可能性がある。体力・技術レベルの異なる学生たちが同一の体育授業において挑戦達成経験を積むためには，学生自らが課題を設定し，進捗を記録し，目標到達度を振り返ることのできる仕掛けが必要となる。本RTDでは目標設定，自己観察，自己評価という3つのパートから成る授業レポートを導入し

た授業の実践例を紹介した。特に授業レポートを記入する際に用いる「技術」「コミュニケーション」「運動量」「授業運営」「苦手なことへの挑戦」の5つの評価指標とその評価基準を明示したルーブリックの使用方

法について詳しく説明を行った。効果検証ではレジリエンスの向上効果が認められなかったことから、今後の検討課題についても触れた。

14. メンタルトレーニング・セミナー

実業団選手を対象としたメンタルトレーニングの事例報告

演 者：山崎 将幸（東亜大学）

企画・司会：下園 博信（福岡大学）

1. 企画趣旨

本セッションでは、メンタルトレーニングを実施するようになったのかという導入経緯から、チーム監督の意向、実際に行った選手へのメンタルトレーニングや心理サポートの内容を紹介しながら、対象の選手に対するメンタルトレーニングや心理サポートのあり方や効果について考えていきたい。事例報告に加えて、メンタルトレーニング指導や心理サポートで実際に行ったレクチャーやエクササイズ（個人目標とチーム目標の共有化を図る目標設定の方法）を体験してもらいながら、「こころ」のトレーニングの方法について事例を通して考えていくこととする。

2. 発表要旨

1) 事例報告の検討

※詳細については、非公開とします。

実業団選手は、所属企業から競技に打ち込む時間を与えられているとともに多くの所属企業からの期待を背負っていることになる（福岡ら、1998）。つまり、競技に関する心理的な側面のサポートのみならず、競技外で生じるプレッシャー等に対しても心理的側面のサポートが重要だと考えられる（阿江ら、2012）。本事例習時間を与えられており、企業からの期待も大きいと考えられる。また、本事例報告の〇〇〇選手については、競技についての成績を所属企業から求められており、競技内外での心理的問題に対処する必要があると考えられる。以上の先行研究や〇〇〇の状況に

より、〇〇〇選手にメンタルトレーニングや心理サポートを実施することは重要であると言える。これらのことを踏まえ、現在、心理サポートを行っているチームについて報告があり、その後、参加者を交えて検討した。

2) ワーク

参加者に行ったワークは、KJ法による考え方のまとめ方、整理の仕方についてであった。「日本代表選手を指導する上で必要な資質は？」というテーマにそって、2グループでのワークを行った。付箋を使用し、キーワードを張り出し、最終的にカテゴリー別に分類するやり方であった。チームへのメンタルトレーニングを実施する場合に、チームの目標設定や試合の目標設定を行うときに、チーム全員で現状を含めた、チームの課題を抽出し、その課題を克服することがチームの目標になったり、試合時の課題となったりすることも多い。このワークでも、最終的に絞り込んだキーワードを中心に、内容をまとめることができた。

15. スチューデント・セッション

若手研究者と語る「大学院生は何をするのか、できるのか」

話題提供者：大橋 充典（久留米大学）、加藤 忠彦（九州産業大学）
 内藤 貴司（国立スポーツ科学センター）
 企画・司会：松田晃二郎（九州大学大学院）、齊藤 篤司（九州大学）

1. 企画趣旨

今年の学生企画は、「学生が発表する場」ではなく、「学生のためになる場」にしたいと考えた。そのため、大学や研究機関で活躍されている若手研究者の先生方を招き、将来研究者を目指す学生が、今後の学生生活や就職活動に最大限活かすことのできることにについて、ディスカッションを含めて教えていただいた。その中では、研究に関する話だけではなく、先生方の大学院生時代に意識していたことや大事にしていたこと、力を注いでいたことなどの話もしていただいた。

2. 発表要旨

流れとしては、まず、3名の先生方に「院生時代に、mustではないが、当たり前のようにやっていたことや意識していたこと」というテーマで、5分程度の講演をしていただいた。まず、加藤忠彦氏（九州産業大学）は、主に、スポーツ競技者（主に部活動生）のサポートに関して、内藤貴司氏（JISS）は、主に研究全般に関して、大橋充典先生（久留米大学）は、例えば、学会参加や研究会、TAや先生や先輩との付き合い等、大学院生としての日々の過ごし方に関する包括的なお話をしてくださいました。その後、学生が主体的かつ実践的に関与できるよう、3名の先生方に対して、

それぞれ興味や関心のある事柄について質問を自由に投げかけ、それについて議論していきました。

3. ディスカッション

参加した大学院生から、「参加・発表する学会の選び方」「研究のテーマ（特に稀有なテーマの場合）の考え方や研究の進め方」「英語学習法について（海外の学会発表や研究者との交流を目的とした）」など、多面的な質問があり、示唆に富んだディスカッションが繰り広げられた。

4. まとめ

例年、本企画に参加する学生の人数が減ってきているという現状があったため、学生がどうすればこの企画に関心を持ち、集まってくれるのかということを考えました。その上で、若手研究者の先生方をお招きし、非常に興味深い、有益なお話をしていただき、学会に参加した大半の学生には参加してもらうことができました。しかしながら、今回の学会に参加した学生自体の人数が非常に少なかったため、人数自体はそれ程多くありませんでした。そのため、来年度以降は、例年九州体育・スポーツ学会に参加している先生方を通じて、学生の参加を積極的に促していただけると、学会も学生企画もさらに盛り上がるのではないかと考えております。

16. 体育連合・学会共同企画

体力づくり（回復）をめざしたストレッチおよび バランストレーニング

演 者：笠井 妙美（東海大学）

企 画：則元 志郎（熊本大学，九州地区大学体育連合 企画委員長）

齊藤 篤司（九州大学，九州体育・スポーツ学会 企画委員長）

1. 発表趣旨

昨年，全国体育連合で模擬授業をした“体力回復を目指したストレッチング”の続編として今回はストレッチングとバランストレーニングをテーマとした。

本大学は1年次に必修の体育系科目が2つ開講されており，今回取り上げるのは，“健康フィットネス理論実習”である。これは，自分の体力を把握し，今後の生活で体力が低下することの不便さを想像し，体力を高校レベルまで回復させることを目標とし，授業を進めている。

この授業では筋力アップ，エアロビクス，コンディショニングと3つのテーマを軸にして授業が進むが，今回はこの中のコンディショニングをテーマとした授業について取り上げる。

コンディショニングをテーマとした授業では，コーディネーショントレーニングとストレッチング，ボールコーディネーションを中心に行っているがどれも学生には好きとは言えないテーマの中で“出来ないことを楽しむ”“自分の身体が思うように動かさないから，動かせるように意識化する”をポイントにおいて自分の身体の使い方，自分の重心など時間をかけて観察し，自分の微細な変化をとらえるように授業を進めている。

2. 発表要旨

素足になり自分の重心，足指の付き方，体全体の状態を内観し，立位バランスでは足裏感覚が重要になることを確認する。いくつかのワーク後，自分の重心や，

足指の付き方等の変化を内観することで日常生活，日常の癖で自分の重心などが変化していることを体験，その後バランストレーニングをすることで普段では気がつかない足裏感覚が確認できた。

コーディネーショントレーニングでは，テニスボールを使用し，利き手，非利き手のボール対応や，2つのボールを同時に使用したバウンド，バウンドなし，相手と異なる動きでの対応など様々な動きを通し，動きの意識化し自分の思い通りに動かす練習を通し，“出来ないから出来る”を体験した。最後はクレイジーボールを使い，予想できない動きに反応しキャッチする遊び要素の高い動きを行った。これは出来なくても罪悪感が少ないため，学生には好評である一方，運動量が高くなるため，怪我等には注意が必要であること無理に追わないことを共通理解のうえ行った。



九州体育・スポーツ学会
第67回大会報告

九州体育・スポーツ学会 第67回大会報告

大会実行委員長 宮 林 達 也 (熊本学園大学)

2018年9月15日(土)から16(日)の2日間、熊本学園大学(熊本市)を会場として、九州体育・スポーツ学会第67回大会が開催された。以下に大会の様態を報告する。

1. 日 程

9月15日(土)(1日目)	
8:30~	受付
8:30~9:40	理事会
10:00~12:00	一般研究発表(口頭発表)
12:00~13:10	昼休み・会議(若手優秀発表賞選考関連会議)
13:10~14:20	特別講演
14:30~16:30	全体シンポジウム
16:40~17:40	総会
18:00~20:00	全体情報交換会

9月16日(日)(2日目)	
8:30~	受付
9:00~10:00	研究推進委員会企画セッション, スチューデント・セッション, ラウンドテーブル・ディスカッション
10:10~12:10	専門分科会シンポジウム(総会含む)
12:20~13:20	トピック・セッション
13:30~15:30	一般研究発表(口頭発表・ポスター発表)
15:40~17:40	メンタルトレーニング・セミナー, 「九州地区大学体育連合」・「九州体育・スポーツ学会」合同企画
17:40	学会大会終了
17:50~	九州地区大学体育連合理事会

2. 総 括

今回の大会開催に向け、1年前から熊本県内の大学体育教員を中心とした実行委員会組織を立ち上げ、7回の会議を開催し準備を進めた。また、昨年12月に企画委員会との合同会議を行い、今大会より会期が2日間となったため、2日目に昼休みを設けずトピック・セッションを組み込むこととした。

大会当日は、初日(15日)の受付より139名の受付が有り、2日間の大会参加受付は合計で187名であった。また、各セッション等を含む発表演題数は90演題であった。

会期が2日間に短縮されたことならびに直近に関連する学会が2大会開催されたことで、参加者の動向が懸念されたが、演題数はここ数年より若干少なかったものの各会場では活発な議論がなされ、有意義な学会大会であったと思われる。

今学会大会にあたり、ご支援いただいた学会事務局、理事会ならびに情報提供いただいた前大会の実行委員の関係者に感謝いたします。また、ご多忙の中、今大会のために時間を割いていただいた県内実行委員ならびに大会スタッフの協力により無事学会大会閉会を迎えることができましたことに、この場を借りて御礼申し上げます。

なお、今大会の運営での改善点ならびに今後の検討課題について以下にまとめる。

- ・事前申し込みによる参加登録を、大会実行委員会ではなく学会事務局に行う会員が10数件あった。また、機関紙掲載用抄録が学会事務局ではなく大会実行委員会に送るケースもあった。申し込み先や資料の送り先を周知徹底する必要

があると考える。

- ・事前に学会事務局と会員名簿の確認を行ったものの、大会プログラム送付先不明による返送が10件ほどあった。さらに大会当日プログラム未到着の申し出もあった。会員の登録住所や在籍状況確認の強化が必要であり、同時に大会当日会委員の応報を速やかに確認できる体制の構築が必要と考える。
- ・参加費、特に特別共同発表者について十分に理解されていないと思われる。この点について周知が必要であると同時に、特別共同発表者の範囲について今後検討の必要が有るものと思われる。
- ・今大会においても当日参加が多く（今大会81名）大会準備の点からも事前登録の推奨他必要であると考ええる。
- ・今大会から2日間の会期となったため、2日目の昼食時間帯のトピック・セッションをランチョンセミナーとして開催する予定であったが、周知不十分で参加者に十分伝達できていなかったものと思われる。

九州体育・スポーツ学会第67回大会 報告

内 容		演題数
一般発表	口頭	26
	ポスター	27
	合 計	53
月 日	内 容	参加者数
9月15日	受付	139
	口頭発表（第1分科会）	10
	口頭発表（第2分科会）	15
	口頭発表（第3分科会）	23
	口頭発表（第4分科会）	10
	口頭発表（第5分科会）	10
	特別講演	83
	全体シンポジウム	85
	総会	51
9月16日	受付	48
	研究推進委員会企画セッション	16
	スチューデント・セッション	10
	ラウンドテーブル・ディスカッション	23
	専門分科会シンポジウム（第1分科会）	16
	専門分科会シンポジウム（第2分科会）	16
	専門分科会シンポジウム（第3分科会）	30
	専門分科会シンポジウム（第4分科会）	18
	専門分科会シンポジウム（第5分科会）	13
	トピック・セッション1	27
	トピック・セッション2	23
	トピック・セッション3	10
	一般口頭発表（第1分科会）	16
	一般口頭発表（第3分科会）	17
	ポスター発表	100
	メンタルトレーニング・セミナー	8
	「九州地区大学体育連合」・「九州体育・スポーツ学会」合同企画	9
学会参加者合計		187

九州体育・スポーツ学会大会 発表演題数の推移（2009年～2018年）

回	開催年	開催場所	一般発表演題数	口頭発表数	ポスター発表数	発表者（教員他）	発表者（学生）	特別講演	全体シンポジウム		分科会シンポジウム		スチューデント・セッション		助成研究		ラウンドトピックセッション等		総演題数
									テーマ	演題数	テーマ	演題数	テーマ	演題数	テーマ	演題数	テーマ	演題数	
58	2009	崇城大学	66	29	37	32	34		1	3	4 ※2,4 合同	8	1	4	2	2	3	9	92
59	2010	鹿児島女子大学	59	27	32	27	32		1	3	4 ※2,4 合同	10	1	3	2	4	1	3	82
60	2011	名桜大学	80	48	32	50	30		1	4	4 ※2,4 合同	8	1	2	1	1	-		95
61	2012	宮崎公立大学	59	32	27	44	15		1	3	4 ※2,4 合同	10	1	2	1	2	-		76
62	2013	九州共立大学	94	34	60	59	35		1	3	4 ※2,4 合同	8	1	2	1	2	3	11	120
63	2014	別府大学	76	36	40	49	27	1	1	3	4 ※2,4 合同	7	1	1	1	3	4	11	102
64	2015	西九州大学	74	34	40	39	35	1	1	4	4 ※2,4 合同	9	1	3	1	1	8	15	107
65	2016	長崎国際大学	88	39	49	60	28	1	1	3	4 ※2,4 合同	7	1	3	1	1	9	19	122
66	2017	福岡大学	70	38	32	50	20	1	1	3	4 ※2,4 合同	12	1	2	1	3	5	12	103
67	2018	熊本学園大学	53	26	27	35	18	1	1	3	5	14	1	3	1	2	6	14	90

九州体育・スポーツ学会事務局ニュース（2018年度第1号）

九州体育・スポーツ学会事務局

2018年度第2回 総務委員会議事録

日 時：平成30年9月14日（金）16時～18時

場 所：熊本学園大学 11号館3階113C教室

出席者：磯貝会長，杉山副会長，齊藤副会長，檜垣副会長，高瀬理事長，宮内事務局長，日高庶務担当，

宮林実行委員会委員

欠席者：正野事務局会計担当

磯貝会長挨拶

【報告事項】

1. 大会企画委員会

特になし。

2. 研究推進委員会

杉山委員長より，若手優秀発表賞審査にかかわり，審査員の選定と書類審査の依頼をしたことが報告された。

3. 編集委員会

特になし。

4. 事務局

宮内事務局長より，会員からの要望により大会プログラムをHPへアップしたこと，および，抄録原稿を事務局に提出してもらうことになっていること（9月14日が締め切り）などが報告された。その際，一般発表抄録は事務局に提出するが，企画発表抄録は企画委員会が担当者に原稿依頼して編集委員会へ提出することが確認された。

5. 会員動向

日高事務局庶務担当より，資料に基づき会員の動向が報告された。会員数は微増で，心配された会員数の急激な減少は見られなかったが，会費納入率は56%にとどまっていることが報告された。

6. 第67回学会大会の準備状況

宮林大会実行委員会より，事前参加申込者122名であることをはじめ，大会準備状況について報告された。

7. 日本体育学会地域協力学会連絡会議報告

高瀬理事長より，日本体育学会地域協力学会連絡会議に参加した際の報告がなされ，協力学会の会員減少について話題になったことなどが紹介された。

8. その他

特になし。

【議事】

1. 大会事前打ち合わせについて

各セッションの写真を撮ることについてや，使用教室の確認が行われ（11号館と14号館，7号館）た。また，緊急連絡先（府内先生の研究室にかけると携帯に転送される）についても確認された。

2. 機関紙投稿規定について

檜垣委員長より，資料に基づいて，投稿規定の一部改正について，日本体育学会の投稿規定が文字数からページ数に変更があったことを受け，それに合わせるようにしたいことの提案がなされ，承認された。

付則には，前回改定の日付も入れることが確認された。

3. 功労賞, 名誉会員

名誉会員は, 連絡のついた方で, 本人の承諾のあった4名のみを理事会に提案することが承認された。

4. 国際体育・健康・スポーツ科学会議2020横浜への参画について

高瀬理事長から資料に基づいて説明がなされ, 学術企画委員として参画することについて意見が求められ, 審議の結果, 理事会で希望者等を募ることとなった。

5. 理事会議事確認

理事会の議事の確認がなされた。

6. 第68回大会の会場大学と開催日程について

齊藤企画委員長より資料に基づいて説明がなされ, 現在までの状況が確認された。その上で, 第68回大会は鹿児島大学を会場に, 鹿児島国際大学を主管として開催されることが承認された。

また, 再来年以降の大会についても意見交換され, 第69回大会は沖縄, 第70回記念大会は福岡, 71回大会は宮崎を開催県とすることが理想的であるなどの意見が出された。

7. その他

2018年度 理事会議事録

日 時：2018年9月15日（土）8：30～

場 所：熊本学園大学

出席者：磯貝会長, 齊藤副会長, 杉山副会長, 檜垣副会長, 高瀬理事長, 宮内事務局長, 池上理事, 下園理事, 高柳理事, 熊谷理事, 田原理事, 西田理事, 東恩納理事, 宮林理事, 瀧理事, 森理事, 伊藤理事, 中島理事, 山口理事, 日高事務局庶務担当

欠席者：兄井理事, 高原理事, 田中理事, 正野事務局会計担当

磯貝会長挨拶

宮林大会実行委員長挨拶

【報告事項】

1. 2017年度～2018年度活動報告

1) 総務委員会報告

高瀬理事長より, 口頭にて, 2018年3月に2017年度第3回総務委員会, 7月に2018年度第1回総務委員会を開催し, 主として大会開催にともなう具体的事項について議論したことなどが報告された。

2) 大会企画委員会報告

齊藤委員長より, 口頭にて, 大会成功に関して協力をお願いしたい旨のお願いと, 来年度の大会会場校が決定したことが報告された。

3) 研究推進委員会

杉山委員長より, 口頭にて, 研究助成, 論文賞, について総務委員会で議論したことの報告と, 優秀発表賞の審議の依頼があった。

4) 編集委員会報告

檜垣委員長より, 口頭にて, 32巻1号と2号の発刊をしたことの報告があった。ならびに, 次号の機関誌に掲載する2編の論文を受理したこと, および, 現在4編を査読中であることが報告された。

5) 事務局報告

宮内事務局長より, 大会号プログラムをHPにアップしたこと, および, 一般発表の機関誌抄録原稿の提出が昨日で締め切られたことの報告があった。理事からは昨年度の抄録がアップされていないことが指摘され, 確認後対応することとなった。

6) その他

特になし

2. 会員動向

日高事務局庶務担当より、資料に基づき説明があり、会員数の状況が報告された。昨年からの増加が認められたが、年会費の納入率は56%にとどまっていることが報告された。

3. 日本体育学会地域協力学会連絡会議報告

高瀬理事長から、口頭にて、日本体育学会地域協力学会連絡会議に参加したことの報告がなされ、地域学会への補助金は一般配分のみになるため減額になることや、2020年の日本体育学会は開催されないこと、国際体育・健康・スポーツ科学会議2020横浜が開催予定であることなどが報告された。

4. その他

特になし。

【議題】

1. 学会賞（奨励論文賞）について

杉山委員長より、資料に基づいて、選考経過および結果について報告がなされた。優秀論文賞は該当なし、奨励論文賞として1件が提案され、原案どおり承認された。

2. 研究助成について

杉山委員長より、資料に基づいて、総務委員会における審議結果として、人文科学分野から1件、自然科学分野から1件を推薦したい旨が報告され、審議の結果、提案どおり承認された。

3. 若手優秀発表賞について

杉山委員長より、若手優秀発表賞の選考委員に評価を依頼済みであること、午後の総務委員会を経て理事会で決定することが確認された。

4. 機関紙の編集

檜垣委員長より、次号の内容及び発刊次期についての報告の後、大会報告の締め切りを10月中旬とし、大会企画委員長に提出するという手順が提案され、承認された。

5. 機関紙投稿規程について

檜垣委員長より、資料に基づいて、編集委員会での検討を経て、総務委員会で審議されたことが報告され、「規定」ではなく「規程」の字句の統一及び、ページ数の緩和について提案され、原案のとおり承認された。

6. 功労賞について

高瀬理事長より、功労賞を3名の方に贈呈する案が提案され、原案のとおり承認された。なお、役職の在任期間を「期」ではなく「年」に変更して資料を残すことが確認された。

7. 名誉会員について

4名の方を名誉会員として推薦することが提案され、承認された。

8. 2017年度会計決算について

宮内事務局長より資料に基づいて説明がなされ、原案のとおり承認された。

9. 2019年度事業計画について

宮内事務局長より資料に基づいて説明がなされ、承認された。ただ、学会誌の返送について質問があり、名簿の整理の必要であることが指摘された。

10. 2019年度予算案について

宮内事務局長より資料に基づいて、説明がなされ、助成金の減額についてや大会企画補助金についての議論はあったが、原案通り承認された。

11. 国際体育・健康・スポーツ科学会議2020横浜における本学会の学術企画委員会としての参加について

磯貝会長より資料に基づいて説明がなされ、総務委員会での審議の経過が報告された。それを受けて、理事会としても、参加を見送ることで意見の統一を見たが、状況によって再検討の必要性が出てきた場合にはメール会議で検討することが確認された。

12. 第68回大会の会場大学と開催日程について

磯貝会長より資料に基づいて説明がなされ、2019年8月31日（土）、9月1日（日）に鹿児島大学を会場に、鹿児島

国際大学を主管として開催することが承認された。
また、2020年は沖縄で開催することも確認された。

13. その他
特になし

2018年度 九州体育・スポーツ学会総会議事録

日 時：平成30年9月15日（土）16時40分～17時40分
場 所：熊本学園大学 14号館 高橋守雄記念ホール

挨拶

宮林大会実行委員長挨拶
磯貝会長挨拶

【報告事項】

1. 2017年度～2018年度の活動報告
 - 1) 総務委員会報告：高瀬理事長
3月、7月、昨日開催された総務委員会において審議してきたことを本日の総会で提案したいとの報告があった。
 - 2) 大会企画委員会報告：斉藤大会企画委員長
大会企画委員会において大会企画をはじめ、準備・運営を行ってきたことや90演題の発表があったこと及び、来年度の大会にむけて準備を始めたことなどが報告された。
 - 3) 研究推進委員会報告：杉山研究推進委員長
学会賞（論文賞）の選考、若手優秀発表賞の選考、研究助成にかかわる選考等を行ったことが報告された。
 - 4) 編集委員会報告：松垣編集委員長
論文投稿について査読者へのお礼が述べられた。
 - 5) 事務局報告：宮内事務局長
必要に応じて情報発信を行ってきたこと、及び、発表抄録の提出の依頼があった。
2. 会員動向：事務局（日高庶務担当）
日高事務局庶務担当より、資料に基づき説明があり、会員数の状況が報告された。昨年からの増加が認められたが、年会費の納入率は56%にとどまっていることが報告された。
3. 学会賞（奨励論文賞）について：杉山研究推進委員長
選考委員会、総務委員会、理事会を経て、優秀論文賞は該当なし、奨励論文賞には加藤氏らの論文「砲丸投・回転投法における投てき者－砲丸系の運動量と砲丸の初速度との関係」に決定したことが報告された。
4. 研究助成について：杉山研究推進委員長
選考委員会、総務委員会、理事会を経て以下の2件が決定したことが報告された。

〈人文社会科学分野〉

研究代表者：西田明史（西九州大学短期大学部）
研究テーマ：「子どもの行為に基づいた運動遊び展開モデル」を媒体にした保幼小接続に関する事例研究

〈自然科学分野〉

研究代表者：村上光平（鹿屋体育大学大学院博士後期課程）
研究テーマ：高校体育授業における投動作改善を目的とした授業実践—ICTを用いた即時フィードバックの効果検証—

5. 若手優秀発表賞：杉山研究推進委員長
選考委員会、総務委員会、理事会での審議を経て、川村若菜（福岡教育大学大学院）氏に決定したことが報告された。
6. 機関誌の編集について：松垣編集委員長

投稿数が増加してきたこと、及び、平成30年11月に33巻1号を発刊予定で、すでに原著論文2件が受理済みであることが報告された。

7. 機関紙投稿規定について：檜垣編集委員長

投稿規定の改正について総務委員会及び理事会で審議したことが報告された。

8. 功労賞について：高瀬理事長

功労賞について、総務委員会で対象者を選定し、理事会において、則元志郎先生（熊本大学）、飯干明先生（鹿児島大学）、中川保敬先生（熊本大学）の3名を功労賞として表彰することについて決定されたことが報告された。

9. 名誉会員について：高瀬理事長

名誉会員に関する規定にもとづいて総務委員会で選定し、瀬戸口照夫先生、福本敏雄先生、岡田猛先生、平田哲史先生の4名を、名誉会員とすることが理事会で決定したことが報告された。

10. 日本体育学会地域協力学会連絡会議報告：高瀬代議員

6月と8月に行われた地域協力学会連絡会において、他地域の学会の状況を確認したことや、補助金の減額、2020年の国際会議の開催等について話し合われたことが報告された。

【議題】

1. 2017年会計決算について

宮内事務局長から資料に基づき説明がなされ、その後、大石監査より、適正に管理運営されていたことが報告され、一般会計、特別会計ともに原案通り承認された。

2. 2019年度事業計画について

宮内事務局長より資料に基づき説明がなされ、原案通り承認された。

3. 2019年予算案について

宮内事務局長より資料に基づき、一般会計、特別会計について提案がなされ、原案通り承認された。

4. 機関誌投稿規程について

檜垣委員長より、改正の理由や検討経過が説明されたあと、「規程」に統一したい旨の提案がなされ承認された。また、投稿ページ数の上限の緩和について、検討経過の説明の後、文字数ではなくページ数とすることが提案され、原案のとおり承認された。

5. 国際体育・健康・スポーツ科学会議2020横浜（仮）における本学会の学術企画委員会としての参加について

会長より、資料に基づき説明がなされ、総務委員会、理事会での審議経過が報告され、学会としては積極的に取り組む必要はないということで承認された。

6. 第68回大会の会場大学と開催日程について

齊藤企画委員長より、次回大会についての進捗状況が説明され、会場を鹿児島大学、主管校を鹿児島国際大学として開催すること、及び、2019年8月31日（土）、9月1日（日）の日程で計画中であることが提案され、承認された。また、次期大会実行委員会の西谷先生から挨拶があった。

7. その他

会員から、発表抄録が補遺版のみで冊子になっていないことについて問題提起があり、再び冊子化することの是非について意見交換がなされ、冊子化することの意義や、コスト面から電子化することの必要性等の意見が出されたが、総務委員会で検討することとなった。

70回記念大会も近くなってきたので、記念誌作成についての検討を始めることの必要性が指摘された。また、記念大会の開催県の順番については議論を始めていることが会長より報告された。

【表彰】

功労賞、奨励論文賞、若手優秀発表賞、開催大学の熊本学園大学に対して表彰が行われた。

◆九州体育・スポーツ学会第68回大会について◆

2019年度の学会大会は、鹿児島大学を会場として開催されます。会期は2019年8月31日（土）、9月1日（日）とな

る予定です。多くの方の参加をお待ちしています。

◆会費納入について◆

日本体育学会会員の会費は自動引き落としになっていますが、本学会のみの会員の会費は個別に振り込んでいただくことになっています。本年度会費をまだ入金されていない方は、早急に下記の学会口座まで振り込みをお願いします。

〈新振込先〉

【ゆうちょ銀行からの振り込みの場合】

郵便振替番号：17310-21783811

加入者名：九州体育・スポーツ学会

【他の金融機関からの振り込みの場合】

ゆうちょ銀行口座名：九州体育・スポーツ学会 店番：七三八（読み ナナサンハチ） 店名：738

預金種目：普通預金 口座番号：2178381

◆会員情報の変更について◆

所属の移動や転居などに伴い、会員登録情報に変更のあった方は速やかに学会事務局までメールにてご連絡ください。変更手続きは基本的にメールで行っています。また、退会される場合もご連絡ください。会員情報の調査・整理作業の必要性が指摘されております。特に卒業、修了後の学生を対象とした情報を把握したいと考えておりますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

九州体育・スポーツ学研究第33巻第1号をお届けします。会員の皆様におかれましては本誌に積極的に論文投稿をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。今後も、皆様のご研究の成果を本誌より広く発信いただけますよう、よろしくお願い致します。

さて、本号に新しい投稿規程を掲載させていただきました。前編集委員会より継続審議しておりました投稿規程について、見直しを進めて参りました。本学会の会員より、「人文・社会学系の論文について、現行の文字数では一定の質的レベルで完結させるのが困難なため、体育学研究と同様に原稿文字数の上限の緩和をお願いしたい」との要望を受け、編集委員会および総務委員会で検討した結果、体育学研究の投稿規程、投稿の手引き、および論文掲載費の算出方法を参考に文字数を変更いたしました。詳細は表紙の裏に掲載しております投稿規程をご確認いただければ幸いです。

最後に、教育・研究そして大学運営などお忙しいところ、査読をご担当いただいた先生方には、迅速な対応をいただきました。ここに、深く感謝申し上げます。

(Y.H.)

編集委員会

檜垣靖樹(委員長) 伊藤友記 山口幸生 田中守
中島憲子

Editorial Board

Y. Higaki (Editor-in-Chief) T. Ito Y. Yamaguchi M. Tanaka
N. Nakashima

平成30年12月13日 印刷
平成30年12月20日 発行

非売品

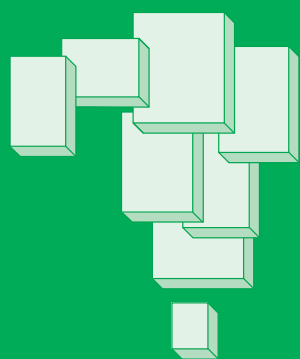
発行者 磯貝浩久

発行所 九州体育・スポーツ学会

所在地 〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西1-1
宮崎大学教育学部内
九州体育・スポーツ学会事務局
事務局代表者 日高正博
Fax 0985-58-7557
E-mail kyutai.office@gmail.com

郵便振替 1. ゆうちょ銀行からの振り込み受取口座
ゆうちょ銀行総合口座
番号 17060-16499461
名称 九州体育・スポーツ学会事務局
2. 他行からの振り込み受取口座
ゆうちょ銀行普通預金
(店名708, 店番708)預金種目:普通預金
番号 1649946
名称 九州体育・スポーツ学会事務局

印刷所 城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6
電話 092-531-7102



Kyushu Journal of Physical Education and Sport

Contents

Original papers

- Akihiro Kubo and Daisuke Matsumoto:
A Study of the “Game” of the Elementary School First Grade
—Improvement of the skill through the participation in game base on Dan-Dan-
Game practice — 1
- Yasutaka Tatsumi:
Changes in the mood and emotions among staff of a collegiate male rugby team during
summer training camps: Comparative study of men, women and grade on the same team 9

The Abstracts of the 67th Kyushu Society of Physical Education and Sport

1. Special Lecture 19
 2. Plenary Symposium 21
 3. Separate Symposium 1 23
 4. Separate Symposium 2 25
 5. Separate Symposium 3 27
 6. Separate Symposium 4 29
 7. Separate Symposium 5 31
 8. Voluntary sessions by separate groups 1 33
 9. Voluntary sessions by separate groups 2 35
 10. Topic Sessions 1 37
 11. Topic Sessions 2 39
 12. Topic Sessions 3 41
 13. Round-table discussion 43
 14. Mental Training Seminar 45
 15. Student Session 47
 16. Joint Symposium of JAUPES and KSPES 49
- Report of the 67th Kyushu Society of Physical Education and Sport** 51
- News** 55